
In The Material ?=? Another World

伊墨雄弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Material ?||? Another

World

【ZPDF】

N1475N

【作者名】

伊墨雄弥

【あらすじ】

死んだはずの御神袴。

しかし、目覚めたそこはなんと魔法が飛び交うファンタジーな異世界！？

その元からある、訓練された最強超能力と、これから覚える魔法を駆使し、敵をなぎ払う！

いつかはきっと元の世界に戻れる事を祈つて……。

これは、『In The Material ?』の続編です。

これから読むと、理解不能になるかもしません。
けどやつぱり大丈夫だと思います。

もし良かつたら、前作も見てくれるといいです。
2タグの、『R15』は、一応です。

お知らせ（前書き）

遂に！

皆さんこんにちは。伊黒雄弥です。

やつとー やつとー！

？がでます！

人気ないのに続編だします！

いくら読者が少なくとも、私は暴走して書き続ける！

感想を見て、やはり、ファンタジーな異世界にトリップするのが良いと
分かりました。

ですが、もしかしたら、お馴染みのあのキャラクターがでるかもし
れません。

まあ、これからも、『マテリアルの中で』をよろしくお願ひします。

魔法について、

私は、そういうネタはもしかしたら苦手かもしけないので、
何かあつたら感想で伝えてください。

まあ、魔法がでるのは後々になりますが……。

第一話 異世界

「「」」

頭が痛い。

そのせいで起きてしまった。
ここは……

「知らない天井だ。というか木」

そ、う。

ゆっくりと起きた俺が最初に見たのは木の枝。

「俺は……何を？」「ここは……何処だ？」

確か俺は本部で、ホムンクルスに……ツ！」

勢い良く起きて、辺りを見回す。

しかし俺の記憶では此処は本部のビルの筈だった物が、なぜか森になっていた。

しかも唯の森ではなく、ひと田でジャングルだと分かるよつた森だ。

「此処は、何処だ？ ホムンクルスは？
それに……」

脳裏に浮かぶ皆の顔。

皆は無事なんだろうか？

だが、なぜ俺がここに居るのか分からぬ。

俺の記憶では、確かに俺は……………『死』を覚悟した。

どうしようもない運命に身を任せた。

なのに、現に俺は生きている。

しかもここが何処だか分からない。

とりあえずここは日本ではない。

まあ、南米かアフリカぐらいだろうが。

多分、何か空間干渉系の能力で飛ばされたのだろうか？

なら時間は？

俺は右腕にある時計を見る。

しかしその時計は止まって、動かなくなっていた。

手がかりがまったく無い、ということに焦り始めたその時、それは
でてきた。

後ろの葉がガサガサと音を立てる。

誰か人か？と思いそちらを向くが、そこに居たのは人ではなかつた。

それは、大きな狼だった。

そうとしか言いようが無い。

だがその大きさが尋常じゃない。

それは、ゆうに全長10mを超える化け物な狼。

その灰色の毛は鈍く光沢を放ち、その鋭く紅い双眸は、こちらを視
界に入れて離さない。

「……これはアフリカでも南米でもないな」

確かに、この狼の殺氣は十分だが、ホムンクルスに比べたらまだまだ甘い。

10㍍の狼? なにそれおいしいの? な感じだ。

……ここに飛ばされて? ちょっとストレス溜まつてるし……

「すまないけど」

巨大狼に、風の力で一瞬で近づき、そしてその頭に触れて能力発動。

能力発動。対象、狼。

効果、破壊。

その瞬間、バンッ!! と大きい破裂音が森の一 角に響いたかと思うと、狼はその頭を破裂させて、一瞬で絶命した。

「食料確保だな。今この状況が良く分からぬから取りあえずは森から出るか」

そう思つて、歩く。歩く。歩き続けた。
因みに狼を、作った袋に入れて扱いで。
だが、

「ここにいるだよ……」

森の中を、一直線にずっと歩き続けた結果、こうなった。
別に、迷つた分けではない。
逆に、森から出たとも言える。
なのに今日の前に広がっている光景は、あまりにも信じられないものだった。

森から抜け出た所は、周りが見渡せる平原だった。
だが、それと同時に目に映つたのは、空。

しかしその空は、蒼く、そしてその蒼く深い空には、紅い満月と紫の満月が浮かんでいた。

「これ、地球じゃ、無い？」

どう見てもこれは地球ではない。
ならこれは？

その様な思考の渦に陥つてゐる時、ふと田の前を見ると、そこには人がいた。

しかしそれは、まあ俗に言つ（俺から見ると何時の時代のものだよ）
山賊の格好をした者達だった。

そこからは突つ立つてゐる俺の周りを取り囲む。

するとそこには口々に言ひ。

「見つよコイツ、あの服見たことねえぞ。高く売れるぜー！」

「すげえ上玉だあ！ 最初は俺にやらせひー！」

「まあ、覚悟しどきなお嬢さん」

とか色々言つてゐる。

因みに、お忘れの方もいるかもしねないが、

俺、御神哀は、初見の人にはよく女と間違えられる容姿と髪型をし

て
い
る。

まあ、そう言つた奴には制裁とかその他諸々を加えてるから、一度
目からは間違えられない。

つ、つめ

「てめえら……俺は、お、ヒーリングだあ———」

」十分後

「すみませんでしたあー！」

ハモりすぎて、一人の声みたくなつて謝罪を土下座と共に受け取る。

「まあ良いよ。それより、教えて欲しい事がある」「なんでしょうかー？」

その後、山賊？に話を聞くと、ここはショーラウトと呼ばれる国で、ここから数キロ北に行くと、首都があるらしい。

その後も色々聞いてみると、驚く内容ばかりだった。

この世界には魔法が存在しており、俺の持つている科学の常識は通用しない。

つまりここは、俺のいた地球がある世界ではない、という事だ。

第一話 異世界（後書き）

主人公の性格が変わってるって事は気にしないで下さい。

第一話 ギルド（魔晄丸）

やつぱつフタントジャーに来たらギルドですよね。

第一話 ギルド

俺は襲つてきた山賊から、この世界の通貨を貰い、山賊達とオサラバした。

その後、風を操り、空に飛び上がつた後、北に向けてゆつくりと飛んで行つた。

しかし、どうにもゆつくりすがると想つて、少しペースを早めると、ものの数秒で街が見えた。

「あれが首都か……」

空中から地面に降り、歩いて街門に行く。

空から飛んでいくと無闇に警戒されるからな……。

俺はそのまま街に入れた。持ち物検査とかも無く、しかも親切にギルドの場所まで教えてくれた。

ギルド、というのは……もう分かつてる人もいるだろ？ が、つまりは依頼委託所？ だ。

依頼主がギルドに依頼を委託し、冒険者諸々が金と引き換えにその依頼を遂行していく、といったものだ。

因みに、俺が行く理由は、確かにまずはギルドで金を稼いでからじゃないと話にならない、と思つたのも事実だ。

帰るための情報なども、それまでの生活費も、全て金が無いと話にならない。

それともう一つ。

これも金絡みなのだが、俺が倒した巨大狼は、頭が無くなつたまままでそのまま後ろの袋に入れ、担いでる。

これらは魔物と呼ばれ、その体から剥ぎ取れる素材は武器防具の良い材料になるんだとか。

そしてその素材を売れるのが、ギルド、という訳だ。

それにしても随分賑やかな街だ。道行く人々にはジロジロ見られる。まあ、この世界は本当に、ゲーム等のファンタジーと一緒にらしく、町並みは中世ヨーロッパに近く、服装も、ファンタジー系のものなので、

その中に俺の、黒い自衛隊制服みたいな奴が居たら目立つだろ？。

俺は今、街門からギルドまで一直線に続いている道を歩いている。

人は多く、首都だからか、活気がある。

道の両端には、露天商が所狭しと並んでいる。

果物屋から武器屋まで様々だ。

この街の形は面白い。

簡単に説明すると、

某鋼が主役の物語の中の、首都の形で、中心に王族が住まう巨大な城が建てられている。

門は複数あり、それぞれから一直線に城へ向けて道が伸びる。

そして、その複数の門から、更に、ギルド、兵隊駐屯所、アイギス魔法学園に、道が伸びている。

しかもその道が非常に複雑且つ綺麗で、本当に練s……魔方陣のような形を取っている。

アイギス魔法学園というのは、このシユラウト王国の中でも一番大きい魔法を教える学園なんだそうだ。

そこを卒業したものは、

王族近衛隊か、王族親衛隊、もしくは小隊、大隊を率いる幹部になる事が多いらしい。

近衛隊はそのまんま。

親衛隊は、近衛隊の上位版。

こんな感じだ。

因みにこの情報はとても有名で、いくら山賊、海賊、浮浪者でも知っている常識らしい。

と、そんな事をおちりしてたらもうギルドに着いた。

ギルドは、いかにも、『猛者達が居ます!』とこつこつと出で立ちで、

入りにくいが、まあそんな事構わず入る。

中に入ると、以外と女、子供も居て驚いた。

ギイと扉が音を立てたので、殆どの野郎はこりりを向いてくる。

それを無視し、『素材取引所』と書かれている窓口へ行く。

するとやーの受付嬢がこちらに気付き、一ヶ口と作り笑いを浮かべて言つ。

「いらっしゃいませ。今日は素材取引」利用で良いですね？」

「ああ。ギルドカードとやらを作つてないんだが良いか？」

ギルドカードとは……これも分かる人は居るだらう。

つまり、免許証、いや、証明証といったものだ。

そこには自身のプロフィールとランクが記される。

ランクは、E～Sまであり、それぞれ受けれる依頼の難易度が違う。因みにSランクは世界に五人しか居ないとか。

これは受付嬢からの知識。

「すみませんが、ご利用の際はカードが必要になります。こちらでも作れるので今作りますか？」

「……分かりました。ではお願ひします」

「ではまず、名前を」

「アイ・ミカミです」

「変わった名前ですね……つと、失礼。
では、次ですが……」

そのままいくつか簡単な質問をされて、ギルドカードができた。

因みに途中で、性別男って言つて、驚かれたのは気にしない。

「これでできました。最初はEランクからになります。自分のランクを20個達成すると、Dランクに上がれます。するどいんどんノルマが高くなつてきます。

一つ上の依頼ならその半分で良いです。

そして一つ上なら一回。

三つ以上上ならそのランクにそのまま格上げとなります。よろしいですね？」

「ああ」

「では、早速ですが魔物の部位を……」

「これだ」

俺はそう言つて、後ろの袋の口を開け、逆さまにして、巨大狼頭無しを受付から見える床に落とした。

因みに10㌢もあるので袋を相当な大きさなのだが。

その死体は、床に落ちて、床をベキシと鳴らせたが気にしないでおひ。

前を再び向くと、受付嬢はその顔を真つ青にして、後ずさりし、次の瞬間、

「ギルドマスター…………！ 大変です…………！」

と大声を出しながら、受付より向こうにある扉から勢い良くでていった。

俺、また何かしたかな？

第一話 ギルド（後書き）

主人公の喋りが少なくなってる気が……

第三話 養子（前書き）

話が短いのは勘弁して下せ……

第二話 養子

受付嬢が大声出して奥の部屋行つてから、また戻ってきて、今はその人に連れられて、この建物の一番上に来ている。

それで、今、前に一人の中年のおじさんが座つてゐる。

この人がギルドマスターかな？

「あの？ あなたは誰ですか？ それに俺は素材引き換えしに来ただけなんですけど」

すると「」ちらを見ていたその人はハア、と溜め息をついてから言つ。

「君があの狼を倒したのか？」

「はい。あつさつと、でしたけど」

「……あれはな、」

まさか、ファンタジーによくでてくる神獣とかじゃないよな？

「あれは、ファンリルと言われて恐れられる、この世界で最上位に位置する魔物の一つだぞ？」

なのになぜギルドカードも作らないお前が倒せる？」

……その逆だつた。

さてどう誤魔化すか……。

「いや、運が良かつたんですよ。丁度寝てる所に出来くわして、

そのまま頭に攻撃したら、倒せただけです

「……そんな見え透いた嘘を言つなど、訳アリか？」

完全にばれた。

けど別に、この人はなぜか大丈夫なような気がする。この人なら、俺が別の世界から来た事を教え、協力してくれそうだと思う。

「……これから話したい事は、他の人には聞かれたくないのですが」「ああ、少し待て。…………良いぞ。これで部屋の外には一切聞こえない」

「ありがとうございます。それで、話したいといつのは……」

俺はそれから、ギルドマスターに、俺の事を全て話した。

俺が異世界？から来た事。

超能力の事。

向こうであつた戦闘の事。

大切な人の為に戻らなければいけない事。

その戻り方について、捜すのを協力して欲しい事。

俺がここまで打ち解けたのは、多分この人の雰囲気が総隊長さんに似ていたからだと思う。

別に、顔とか声、喋り方が似てるとかじゃない。

ただ、総隊長さんもそうだったけれど、何か父親の様なものを持つてると感じられた。

案の定、ギルドマスターは俺の話を信じてくれた。

「まあ、お主の服装と、その、超能力？を見せられたり信じるしかあるまい」

「ありがとうございます……

……傲慢なのは分かっています。ですが！

どうか、元の世界に戻る方法を搜すのを手伝って下さー！
お願いします！」

目一杯の礼をする。

するとギルドマスターは、

「ハツハツハ！ 恋人の為に戻ろうとするその意気や良し！
良いだろー！ お前は私の養子になれ！
私が養つてやるがその代わり！
元の世界に戻る方法を見つけるまでギルドで働け！
依頼の報酬は貰つて良い！ 朝飯夜飯と一緒に食付いて、寝床も用意してやる！」

「え…………えっと、その、

あ、ありがとうございます！！

俺、ギルドの為に、元の世界に戻る為、頑張らせてもらいます！」

純粹に嬉しかった。

まだ会つて間もない俺の、この世界の住人からしたらふざけた話を信じてくれ、

そして俺を養子として面倒を見てくれるなど、本当に、嬉しかった。

「でも……」

「ん？」

「あの『デカ^{デカ}、ぶつ^ン』って、どうなるんですか？」

「……考^フえてない」

第三話 養子（後書き）

主人公の性格がまったくと言って良いほど変わってるのには
気にして！

お願いします。

俺は今、文才の無さで自分を責め、
自分自身で「俺のライフはとつくにジゼロよ！」状態になつてます。

第四話 魔力の説明（前書き）

今回は魔力の説明です。

第四話 魔力の説明

結局、フェンリルは、確かに売るとしたら莫大な資産が築けるらしいが、

マスター（ギルドマスターの略）の薦めで、確かに必要ないのだが、持つてないと怪しまれるので、武器と防具、の材料にする。

フェンリルの皮は、昔に、マスターが幼少の頃一回だけ見たことがあるらしい。

それはとても良い武器防具の材料となるらしい。

そしてそれと同時に、

まあ予想はしていたが、俺はランクEから一気にランクSになってしまった。

因みに、ランクSはランクの中でも特別で、その個人情報は明かしてはならないらしい。

なぜなら、ランクSという事で、確かに味方も増えるが、それと同時に敵も増える、という事だ。

なので、基本的にランクSの人間は一般人に正体を明かしてはいけないらしい。

で、もうカードは更新した。

今はマスターの家に居る。これも豪邸だが……。

そして、マスターの書斎に来ている。

「で、用とはなんですか？」

それとも、依頼がもう来たんですか？」

「まあそう焦るな。何か手がかりがあつたら私から言ひ。それより、今日からアイには、魔法を覚えてもらひ

「魔法、ですか？」

しかし俺は魔法など無い異世界から来たんですよ？ そんな俺が魔法使えるのですか？」

「それに関しては大丈夫。

私にはアイの膨大な魔力が見える

「膨大、ですか？」

「そうだ。

なぜかは知らんが、君は超能力？を無視しても普通にランクS級の魔法使いだよ」

「そうですか。ですが、俺には超能力があるんです！ 今更魔法を覚えるのも……「君は今まで良いのかな？ ホムンクルスとやらに負けた時のまま帰つていいのか？」 それは……」

「エゴだよ、それは

「ツ！ ……」

「君は、大切な人が待つてゐる、と言つたね？」

「はい……」

「それなら、今の所できる事は、いや、やりたい事な何かな？」

俺がやりたい事、それは、
向こうの階を護る事。

もう一度と、傷つけさせない程強く、強くなる事。

「君のためにも、魔法は習得しておきなさい」

「…………ありがとう、アゼリコ様」

「いや、私は何もしていな」。これは君の意思だ。

……それより、魔法を教えよう。

着いてきなさい！」

しづらく降りるとまた扉がある。
マスターはその扉をゆっくりと、開ける。
俺も急いでついてく。

「アゼリが……私がまだ君の様に若い頃に魔法の修行をした部屋だ

中は、とても広い。
多分、部隊の訓練場くらい広いと思つ。

その中央に行き、マスターが振り返る。

「まず、魔法の基礎だ。

魔法の元は魔力、これは分かるね？」

「はい。それくらいなら……」

「魔力にはまず、外的魔力、内的魔力に分かれる。これらは文字通りだ。

内的魔力は、元来人の体に生まれた時から備わっているもので、その量は先天的だ。

なので、いくら特訓してもまったく上限は変わらない。

これは体から自然にあふれるもので、普通に生活していれば普通に魔力は回復する。

内的魔力を完全に失うと、意識不明、最悪の場合は死ぬから気をつける。

外的魔力。

これはこの世界に元々あるもので、内的魔力が宙に舞っているものと同じと思つてい。

しかしこれらは、人には絶対に取り込めない。何故かは知らんが。だがなぜこれを教えたかというと、

この外的魔力は、上級魔法、まあこれは後で説明する、以上の魔法を使う時、内的魔力にプラスし、補助する役割を担うんだ。

その他には、身体の一部に集め、体術を強くしたりする事もできる。少し長かつたけど分かつたかな？」

「……はい、なんとかですけど分かりました」

「 そりか、じゃあ次は.....」

憶える事多いな.....

第四話 魔力の説明（後書き）

魔法の説明は長くなるので、次回を丸ごと使いたいと思います。

第五話 魔法の階級と属性（前書き）

タイトル通りのもの説明しただけです。

第五話 魔法の階級と属性

「次の説明は、魔法についてだ。

魔法は、まず大まかに、『初級魔法』、『中級魔法』、『上級魔法』の三種類がある。

本当はこの三つの種類の他にも、『禁忌魔法』と『神氣魔法』があるが、

これらは、はつきり言つと、使える奴が居ない。

Sランク保持者でも、『禁忌魔法』を使うと一発で死ねるからな。

『神氣魔法』は伝説上のもので、現実に存在しているかは未だ分からぬ。

さつきの魔力の話でも言つたが、

初級中級は内的魔力だけで使うものだ。

上級禁忌は、内的魔力 + 外的魔力、といつ感じだ。

これは、中級と上級の差が大きすぎて、上級魔法を補助無しでする
と、

魔力の枯渇で普通に気絶するからだ

「マスターはどうなんですか？」

「ああ。私は上級魔法なら補助無しで十発は撃てるよ。
けど、さすがに禁忌魔法は駄目だよ。

ギルドにある図書館の最奥部の禁書庫に行かなきゃ、呪文さえ分か

らないし。

「これの事は後で説明するよ。これで良いかな?」

「魔法の階級は、初級、中級、上級、禁忌、神氣がある、という事ですね。」

そして、外的魔力を補助に使うのが上級以上。

更に、禁忌は存在してはいるけど使えない。

「神氣は伝説上のもの。これで良いですか?」

「そう。アイはもの分かりが良くて教えがいがある。

次は、魔法の属性だ。

魔法には、属性というものがある。

属性とは、人に生まれた時からある先天的な才能で、魔法は生まれ持つた属性でなければ使えない。

いや……少し語弊があつたな。

正確には、生まれ持つた属性以外の魔法も使える事は使える。だが、その分威力はとても低くなってしまう。

これは、自身の属性以外の魔法は、外的魔力も利用するからだ。

属性にはいくつか種類がある。

有名所から挙げていけば、『火』、『水』、『風』、『土』の四つがある。

そして、極稀に発現する属性で、『闇』、『光』がある。

属性発現は、血縁関係が関わると言われているが、この一つは、突然変異でできるもので、今の所、闇属性、光属性から同じ属性の子孫ができた、というのを聞いた事がない。

そして、これにもまだ続きがある。

後二つ、これも伝説に出てくる属性で、『天』と『魔』がある。

どうだ？ 分かったか？ 無理して覚えなくてもいいぞ？

「大丈夫です。

確かに、属性は生まれた時から決まつていて、自分の属性以外の魔法は大部分を外的魔力に任せることから、必然的に威力が弱まる。

属性の種類に、まず基本の四属性の、『火』、『水』、『風』、『土』があり、

突然変異で発現する、稀な属性の、『闇』、『光』がある。

そして、伝説上の属性である、『天』と『魔』。

これで良いですよね？」

「ああ。

言い忘れていたが、属性を複数持つ者も偶にいる。

そして、その様な奴らも、そうじゃなくても、属性複数を上手く掛

け合わせ、

新たな属性を作る事もできる。

『火』 × 『風』 = 『炎』

『火』 × 『土』 = 『鉄クロガネ』

『水』 × 『風』 = 『雷』

『水』 × 『土』 = 『木』

等、色々ある。

勿論、この四つ以外も組み合わせはあるし、
世界には、三属性混合属性、なんて滅茶苦茶なもの作ってるところもあるらしい。

まあ、魔法の事で知つておく事はこれぐらいだ。次は、お前の属性
と魔力値を測る」

「測る、ですか。

はい。分かりました」

自分が何属性か楽しみだ。これは純粋に。

第五話 魔法の階級と属性（後編）(後編)

タイトル通りに説明したら、すこし短いですね。

でも、いつのなつたら本編始まるんでしよう。

因みに言つて、学園編は遠いです。

第六話 魔力値測定、属性判定

「……」

俺はマスターに連れられ、さっき居た部屋の更に奥にある倉庫に連れてこられている。
そこには……やっぱりこれはテンプレなのか、水晶が一つ置いてあった。

「まずはこいつちの水晶に触れてみる。魔力値が出てくる。
自身の魔力値を知らなければ、どんな魔法を使え、そしてどれくらいの数魔法を使えるか
などの戦略も立てられない。だからまずはこれからだ」

「はい。分かりました」

俺はその水晶に近づき、左手で触れた。
右手の義手は話したが、自分の体ではないと魔力は無いので左手だ。

左手で水晶に触れた途端、水晶は部屋全体を覆う程の強烈な光を放つた。

「はっ！？ 何ですかこれ！」

何がなんだか分からなく、マスターに聞いたが、マスターは慣れているといった感じで答える。

「これは魔力値を数値化する時にでる光だ。

因みに言つとくと、これは誰でも光るから心配するな

「そうですか……」

すると光が止み、マスターが水晶を見るが、

「ん？ おかしいな……。故障か？」

俺も水晶を見てみると、そこには数字は表れていなかつた。改めて水晶全体を見るが、数字はどこにも無い。

「故障なんてあるんですか？」

「うーん……今まで無かつたんだけどな。まあ、魔力値測定はまた後にして、次の属性判定やるぞ！」

そう言って、隣に置いてある水晶に行く。
俺も気持ちを切り替えてやるか。

「いきます」

そう言って、また左手で水晶に触れる。

今度は水晶は光らないが、水晶の中で煙が生まれ、それが色を持つていく。

「何だこれは？」

今度疑問を発したのはマスターだった。

水晶の中では、煙は色を持つている。

その色は純白と漆黒。一つの色が互いに拮抗しているような感じ

純白は、例えるならば、まるで天使の羽のよつに神々しい輝きを放つている。

……科学が全ての世界から来た俺が言つのも何だが。

漆黒は、まるで無に見える。

色であつて色でない。そういう感覚。色といつよりも、光の無い暗闇のようだ。

自分で言い得て妙だが。

「これつて何属性なんですか？」

「…………」

「マスター？」

「…………分からぬ」

「はい？」

「こんな色など見たことが無い。

二属性持ちという事は分かるのだが、この色は初めて見た。

大体、属性と色の関係は、

火 赤

水 青

風 緑

土 茶

光 黄

闇 灰

といづ、とても単純な色合いだ。

そして、その属性の色が濃ければ濃い程、はつきりしていればして
いる程、

その属性を使いやすい、という事があつたのだが……。

つまり、同じ属性でも、上下が分かれているんだ。

だが、こんな一色は初めて見た。それに、こじまではつきりしてい
る色も「

「じゃあ俺の属性は一体?」

「…………すまないが今はまったく分からない。

一応、この後魔法の実践をしてみるが、その時に分かるだろう

「そうですか。分かりました」

「よし。じゃあ行くぞ!」

俺とマスターは水晶の置いてある部屋を後にし、広い部屋に戻った。

「部屋」（三人称SIDE）

御神とギルドマスターが去った部屋。

ガツシャーン！

大きな甲高い音が部屋内に響いた。
尤も、部屋は防音性が高い様に作つてあるのか、部屋すぐ外を歩いている二人には聞こえない。

その音の正体は、水晶。

その内、故障と言われていた水晶は、まるでガラスのようだ、もつ
修復ができない程に粉々に、
砕け散つていた。

後日、これが見つかって、ギルドマスターが怒り狂つたとか。
(ギルドマスター程の金持ちでも戦々恐々とする値段らしい)

SIDE END

俺とマスターは広い部屋に戻つて來た。

「じゃあ、魔法の実践を行つ。
簡単に説明しよう。

魔法とは、まず『発動詠唱』から、『呪文名』と、一つを組み合わ
せる。

まあ、大体の魔法が、発動詠唱は同じだから、憶えるのは少ないけどな。

まずは、初級魔法の、一番簡単な呪文からだ。

俺の詠唱を聞いた後、それを実践して見ろ。

お前の属性は火じゃないが、外的魔力が十分満たしてある部屋だからな

「そりなんですか」

「そうだ。よし、いくぞ！」

一度しか言わないからよく聞いとけ！」

遂に魔法を使うのか。

楽しみだな。

属性が分からなかつたのが心残りだけど……

第六話 魔力値測定、属性判定（後書き）

次回！ やつと魔法ができる！

発動詠唱は、他の小説の様に独創的でできないかもしませんが…

：

第七話 初級魔法勝負と強化魔法（前書き）

少年練習中……

第七話 初級魔法勝負と強化魔法

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

「どうした？ まだやれるはずだぞ？」

……俺の前には、服にさえ埃一つ付いていないマスターの姿。俺は、服の一部に焦げ目が付いてるし、何より体力が持たない。

なぜこうなったか。

それは単純明快。魔法の実践訓練をしている。

俺は、マスターの詠唱を復讐しただけで、全属性の初級魔法を使えた。
だが、それはどれも外的魔力の補助で行っているもので、
まあ、それでも十分に威力はあるらしい。自分の属性に合つた魔法は無かつた。

しかし、ここでマスターは、初級魔法なら全属性を使用できるので、
一回、模擬戦をしてみないか、
といつ事になつた。

それで、今俺は、自分で言つのも何だが、ボロボロなのである。

「いやいや。さすがにともう無理です。
魔力残量はともかく、体力が持ちませんつて

「……問答無用！ お前が倒れるまでやるぞ」

「はい——？」

「火の精霊、我に答えよ！　『アグニ・ランス』！」

もう何度もくらつたか分からぬ火でできた真っ赤な槍が三つ程飛んでくる。

「水の精霊、我に答えよ！　『ウォーター・ジャベリン』！」

その火の槍の軌道に当てるよつに、こちらも三つの水でできた槍を飛ばす。

そして、マスターと俺の放つた魔法が交わり、水を火が蒸発させ、火を水で消す。

「甘い！」

「何つ！？　ガハッ！」

魔法の方を見ていた俺の目の前に突然現れ、蹴りを鳩尾に入れてくれた。

と、理解した時にはもう既に、俺は地面を転がっていた。

「ちょっと、今なんですかマスター？」

この勝負つて初級魔法以外は使っちゃ駄目なんじやないですか？」

「それなら大丈夫だ。この部分強化魔法は初級の魔法に入る。一応だが。

それより！　さつきから魔法を撃つた後の反応が遅いと言つてているだろう！

つて、大丈夫か？ 聞こえてるか？」

「ハアツ、ゼエツ、ハアツ……も、もつ無理です……」

「はあ……しようがない。初級魔法実践訓練は俺の勝ち。お前は魔法の後の反応を早くするように。以上。

で、次は一応初級魔法に分類される『身体強化魔法』を憶えようと思つ」

「で、でも……」、これじゃあ無理ですって……

「大丈夫だ。

水の精霊、彼の者を癒せ。『ヒーリング』。

……」それでいいだろ。立てるだろ？」

「……！ はい。大丈夫そうです」

これは回復系魔法だろ？ 傷の痛みも無く、体力も戻つていい。

「そつか。じゃあ身体強化魔法の基礎である、部分強化魔法を習得するぞ！」

部分強化魔法は、その文字通り、体の一部だけを外的魔力で強化する魔法だ。

これを利用すれば、一瞬で相手の間合いに詰めれたり、刃を素手で相手する事もできる。

まあ、そんな事は応用の粹で、俺やうランクしか出来ないがな

「すごいんですね、強化魔法って。

それで、まずは何処の強化を覚えるんですか？」

「まずは、基本の部位として手と足だ。まずは手足の強化を憶えてもらつ、が……

強化魔法には、やり方、というもののが存在しない。

勿論始動詠唱も無い。

その始動方法は人それぞれで見出すしかない。
だから……」

マスターは喋りながら壁から出でる怪しい何かの紐を引っ張る。

すると……

俺は落ちた。

「えつ！？ ええええ！？ 嘘だろお――――――！」

落ちて落ちて、落ちまくつた。
とこりか凄い深いこの穴。

すると地面が見える。

石の地面が。

「くそつ！ 能力発動！ 対象自身」

俺は風を操り、自分の自由落下している体をゆっくりとして、地面に着地した。

そして上を見上げる。

「何するんですか！」

もう米粒程しか見えないマスターに大声で聞く。

「……自分で手と足の部分強化魔法を使う為のものだ。
高さは50cmある。それを、手、または足を強化して這い上がつて
来い。

始動方法は自分で見出せ。穴の壁は、ほぼ凹凸が無いように作って
ある。

そういう事で頑張れ

やつぱりと穴の底から見えない所に行つてしまつた。

「…………え…………」

一文字の弦きは穴に反響しながら消えていった……。

第七話 初級魔法勝負と強化魔法（後書き）

少年沈默中……

第八話 駆け上がる（前書き）

サブタイ通り

第八話 駆け上がる

「……部分強化魔法、『両脚』」

大気中の外的魔力を操り、両脚に纏わせる。
そして一気に壁に向かつて走り……

「おらアアアアア……！」

壁を駆け上がる！

まるで重力に反しているかの様に壁を走る。
これができるのは両脚を強化し、瞬発力とスピードを
とてつもなく人外的にしてあるからだ。

しかし、

ズルツ

「あ、またこけた」

そして落ちる。

で、風を操り着地する。

「どうして駄目なんだ？ 両脚に纏わせる事はできた。なのにどう
して……」

すると上からいきなり声が穴に響く。

「おーい。強化は少しふうりこはできたか——？」

「……駄目ですマスター。いくつ脚に纏わせてもかすがに500は無理ですよ——」

「じゃあヒントだー。」

『纏わせる』、これは間違いだ。じゃあ頑張れよ。因みにお前が穴に落ちてから一週間だ

「ええつーもう少しさんなにー?」

マスターは言いたい事を言つと、すぐ穴から見えない所に行つた。

とこりが、穴だから時間感覚狂うし、昼夜の区別もつかない。まず、この穴があるのが隠し部屋だから忍も無いし。

飯はちゃんとあるのでいいんだが、まだ7食しか食つてないから一田ちょいだと思ってた。

一日一食なのね、はい。

とつあえず、両脚はまた無理だったから、次は……

「部分強化魔法、『両腕』」

大気中の外的魔力を(〃)

そして一気に壁へ走り、

バーン！

そして片手で壁を思いつきり叩く。

その勢いで反対側に飛んで行き、斜め下向きに壁を叩く。

それで斜め上に飛び、また反対側の壁を叩く。

そして更に……

と、こんな感じで頑張って上ひびとするのだが……

やつぱり途中で勢いがなくなつてこき、

スカツ

「やばつー！『届かない！』

で、また落ちて着地。

「はあー。やつぱり両腕上り方は駄目なのか？
やつぱり両脚戦法の方が良いか？」

だがマスターが言つていたのを思い返す。

「『『纏わせる』、これは間違いだ、か……』

纏わせるが間違いというならば、外的魔力をどのようにして操れば
良いのだろうか？

形を成して装着？みたいな感じか？

いや、マスターはあの時そんな事をしてなかつた。なら何をしてた？

先程（といつても一週間前だが）行つた実践訓練で最後にマスターは強化魔法をした。

その時の様子を思い出せ……。

あの時の戦闘を思い出す。

そして、マスターが最後に使つていたのは……

「ツ！ そういう事か！」

そうだ、思い出した。あの時、最後にマスターが使つていた強化魔法。

今思つと、脚の周りに魔力が感じられなかつた。

つまり、脚の周りに纏わせてたんじやない。

脚の内部。体の一部として外的魔力を操作していた！

「そうと分かつたなら……

部分強化魔法、『両脚』

外的魔力を操り、そして、両脚と一体化すること！

つて、あれ？ 何故か普通にできたんですけど。

……多分、まあ憶測だけど、

俺は超能力の性質上、何かを操る事が多かつた。

だからこれも……つて感覚か？

「まあ、これならいけるかもな……」

そして壁に向かつて走り、更に、上る！

「ウオオオオオオ！」

「すげえ！ さっきも十分人外の域だったが、これはヤバイ。
さっきの倍以上のスピードだよ。」

俺はスピードをまったく衰えさせる事無く、穴の中から飛び出した。

「やつたああああ！」

いやー、タネが分かれば以外と簡単だったな！

第八話 駆け上がる（後書き）

意外とあっさり終わつた。

第九話 御代官の悪事

穴から駆け上がった其処にはマスターが居た。

「え？ もうできたのか？ そいつは凄いな。
で、どうこう風にやつたんだ？」

「いや、俺は前にマスターがやつてたのを真似しただけです。
「……両脚と外的魔力を一体化させるよつな感じで」

「……ほう。凄いな……」

「え？ 何がですか？」

俺としちゃ、普通なんだが、何かあつたのか？

「いや実は、その一体化する強化魔法は、学生が辿り付けるものじ
や無いんだよ。

確かにそれを学ばせたかったのは事実だけど、予想では一ヶ月ぐら
い掛かると予想してたから。

それをたつた一週間、それに私の助言一つで理解し、実行に移すな
んで、早々出来るものじゃない

「…………それは……ありがとうございます。

つて、それよりも教えて欲しい事が！」

「君の属性の事？」

「はい！」

「……はつきり言つて私は驚いたよ。

君は、英雄にでも魔王にでもなれるんだよ？」

「は？」

よく聞こえなかつた。英雄？ 魔王？
何かの聞き間違いか？

「君の属性は伝説の『天』と『魔』って言つてるんだよ……」

「は？ それって本当ですか？」

「ああ、本当だ」

「天属性と魔属性って……伝説の属性……。
確か此の世を救う力と滅ぼす力でしたっけ？」

「ああ。それゆえに伝説になり、そして年月が経ち、人々の記憶から
忘れ去られ、
そして存在すら伝説になつた属性。

私も、古い、とても古い文書を偶然見つけなければアイの属性に気が
付かなかつただろう。

これはとても凄い発見だ。

だがなアイ。これは同時にお前の危機でもある

「俺の危機？」

「天属性と魔属性。

この両方を持つていれば必ず英雄視され、この国の侵略という欲を搔き立てる物にしかならない。

それでもお前はその属性について知りたいか?」

「…………俺は、

俺は元の世界に戻り、この手で愛する人達を助けなければいけません。

だから、俺はこの世界で何でもするし、その為の覚悟はひとつくらいできてるつもりです」

「…………」

「…………」

「ハア……分かったよ。

これで『はい』とか『いいえ』とか軽々しく口にしたら殺す所だったけど、

やっぱりアイはアイだな。

いいだろ?一、天、魔属性、両方を覚えるぞ!」

「はい!」

「と言つても、やはり天魔は此の世に今ある資料など皆無といつて良いほどだ。

私が天魔について調べた所だって、Sランクの中でも三人程しか入れないものだし、

其処にあつた書物の中にも魔法については書かれていない

「え……？　じゃ、じゃあ一体どうすれば……」

天魔の属性とは分かつたが、その詠唱内容が分からなければ意味がない。

そんなの宝の持ち腐れだ。

するとそんな俺の様子に気が付いたのかマスターが言つ。

「大丈夫だ！　そんな時の為の『ロストエリア』だ！」

「ロストエリア？」

「そう、『ロストエリア遺跡』だ。

それは、現在では失われた古代の遺物や呪具とかが眠つてゐる、まだ調査中の場所。

噂では、昔話にでてくる様な悪魔が眠つてゐるって噂もあるぐらいだ

「成る程。そこを独自に調査して、古代の魔法、つまり天属性、魔属性についての書物、あるいは遺物を取つて来るんですね」

「ああ、そうだ。お前にはこれから、外的魔力による全属性中級魔法講座を予定している。

それぐらい憶えれば『ロストエリア遺跡』を一人で調査しても大丈夫だろ？

「！　はい、頑張らせてもらいます！」

「で、やつぱり盗つて良いんですね？」

「ああ、盗つて、な。

「フフ、良いんだよ。お前は俺の息子だしな。」

それに、俺だってアイ程じや あないし……」「

۱۷۷

「「ハアーハツハツハツハ！－！－！」

この笑いは、地上の、更に部屋外にまで聞こえていたとか。

第九話 御代官の悪事（後書き）

主人公とマスターの性格が一時的に壊れました。

バツ 土下座の音

御免なさい！ すみません！

第十話 出発！ 目的地はーー？先ーー？（前書き）

遺跡で荒稼ぎフイーバーしに行きます。

第十話 出発！ 目的地は100？先！？

「土の精靈、我に答えよ。そして大いなる力、ここに顕現せん！」

『アラウンド・ストーン』！

地面から直径1m程の岩石が幾つか飛んで行き、的に寸分の狂い無く当たる。

「はい。これで全属性中級魔法の会得完了だな」

「……こんな簡単に進められて良いんでしょうか？」

「まあ、元々君には魔力が沢山あるし、超能力って言つて言つて結構近いものがあるからね、魔法には」

「まあ、使って困る事は無いんですけど……」

「なら良いだろ。それより、さつき話した事なんだがな……

「『遺跡』の事ですか？ 何処か一度良さそうな所見つかったんですけど？」

「ああ、結構近くにあった。

まだギルドでも、王室でも、調査隊が結成されてなく、それでいて全属性初中級魔法があればいけそうな所」

「……いつ行きますか？」

「君一人だけ、明日には行つてもうう

「明日、ですか。結構急ですね……」

「まあ、ノロノロしてたら先に調査されるかもしれないからね。で、場所なんだけど……この街から一〇〇km程東に行つた所なんだよ」

「一〇〇? って……遠いじゃないですか!」

「いや、これでも近いほうだよ。だって考えてみなよ? 街の近くに『遺跡』があつたら、すぐさま調査されてるよ。だから、これでも近いほう」

「せうですね……なら良いんですけど」

「じゃあ、準備はいつちがいとくから。アイはゆつくり休みなよ。いくら魔力があるからって、こんなに続けて訓練してたら気が持たないから。じゃ、お休み」

「お休み?」

「外はもう夜なの。だから、お休み」

「……お、お休み……」

そのままマスターは部屋から出て行つたので、俺もそのままの後部屋を出、言っていた部屋に行つた。

部屋の中は、机と椅子のセットが一つ、木製ベッドが一つと、

簡易な部屋だった。

「はあ……疲れた……」

制服から私服（マスターがいつの間にか買ってくれた）に着替え、そのままベッドにダイブし、睡魔に身を任せた……。

ここは、ビルの中？

泣き声が聞こえる、そちらの方を見る。

体中を切り裂かれ、血を大量に流している少女。

そして、体から骨を突き出し倒れている少年。

更に、そこから少し離れた所にいる……真っ黒な、物。

その傍で、涙を枯らせ、絶望の表情の一人の……

バツー！

布団を蹴つて、勢い良く起き上がる。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ…………夢か…………」

あれは夢のはずだが…………妙にリアリティがあつた。

「…………紫…………琴雪…………皆、絶対俺は、戻つてみせる…………」

部屋の椅子に掛けられている制服を取り、私服から着替える。そして部屋から出て、ダイニングに行く。

そこには、既にマスターが居た。

「よひ。 やつと起きたか。 朝食は其処にある。 サツサと食べひよ? 今日は『遺跡』に行くんだから」

「はい」

木製の椅子に座り、目の前にある黒パンを食べ、コンソメ（なのがどうかは分からないうが）スープを飲む。

さつさと食つたあと、マスターの所に行つて、今回の詳細を聞く。

「今日、早速だが行く『遺跡』は、
ここから東100? 地点にある『アスローム遺跡』だ。アスローム・ロストエリア

そこは、だいたいが竜種の魔物の住処になつてゐる場所だ。

竜種の中にはとても強く強い、この前話した様な、最上位の魔物である『リントヴルム』

なんて言つ奴も居るが、ここは遺跡ではない。……と呑みながら、安心して逝つてここへ！」

「安心できませんよね、その情報……」

「準備としては……」

まあ、お前の超能力があれば、別に何も無くて良くて済つんだが、何か重要な書物類を見つけたら

この道具袋の中にある箱に入れれば良い。

別に遺跡とかの壁画なんてのも何かあつたら削り取つて来ていいから。

……質問は？

「あります。ここまでの準備、ありがとうございます。じゃあ、行つてきますよ。」

あ、魔物つて、やつぱつといふとへと換金でありますか？

「ああ。荒稼ぎして来い！」

「はい！ 行つてきます！」

第十話 出発ー 目的地は100?先ー? (後書き)

荒稼ぎ／万歳。

しつこいですね、はい。

だって俺らは！（俺ら？）

『金のために飛び込み、金のために泳ぎ、

金のために潜り、金のために沈めるぞー！』 んやめだかボックス

すみません……自重します。

第十一話 疾走爆走

「さてと……行くか……」

とりあえず街から出て、東に歩いていく。
人気の無い所を見つけたら、慎重に、見つからない様に飛ぶつもり
だが。

「けどこれって、目立ちすぎだろ……」

俺の服装は、制服ではない。

マスター曰く、

「その服はとても精密に、そして丁寧に織り込まれていて、この世
界ではありえない物」

と言つていた。

つまり、そつちを着てた方がとても目立つのだが、

「これでもあんまり変わらないよな……」

まだ街からあまり離れていない、近郊という事で、
魔物はまったく居なく、人の往来があまああるのだが、
さつきから道行く人々が俺を、いや、俺の装備を見ていく。

今の服装（装備）は、出かける前にいきなりマスターから渡された物で、

これを着て、この武器で戦えば、超能力なんて使わなくても大丈夫

だと言つていた。

確かに、超能力乱用で、国に不信感を持たれたり、無駄に警戒されるのも回避したいのだが。

「IJの装備は無いだろ」

さつきから俺の装備を気に掛けている人が多いだろう。

まあ、他の小説に比べたら、矮小かもしれんが……ん？ 何か言つたか、俺？

まあ、気を取り直して、
今の俺の装備。

全体的に、FF7ACのク ウドの服装を灰色っぽくしたもの。
(狼原料だから?)

俺には似合わないがな……。あれはクラ ドにしか似合わないんだ
よー！

あ、因みに、本物と左右対称になつてゐる。つまり、俺の場合右手が
全体スッポリ覆われてるつて事。

これは、やっぱりこつちで機械なんて見せたら、ちょっと魔女狩り
再臨みたいな事になりそつだから。

まあ、この服も、材料が最高で、
しかも、ギルドの全技術を駆使して作ったから、ここまでの物が出
来たらしい。
なんでそこまで……。

で、今の俺の武器。

これも、無理だ。

なんでクラウドの服装にセフィ
ちゃんと組み合わせが！
スの所有物っぽい太刀？

やつぱりこは大剣系なのかと思つたけど、太刀でした！ しかも、
これも掘り出し物！

やつぱりこのでかい太刀。『遺跡』で見つかった古文書を参考に作
つたらしい。
でも、作つたのが大きすぎて、しかも今までに無い武器だから、誰
も扱える人が居なかつたとか。

それが俺に回つて來た、という訳。

……改めて見ると、やつぱり田立つ。

格好良いのは良かつたんだけど、やつぱり田立つ。

確かにこっちで太刀を使えるのは嬉しいけど、やつぱり田立つ。

「一言田には田立つてか？」

まあ、もうそれも割り切る事にした。

いつまで悩んでも関係無いし。時間の無駄だし。

よし、どんどん歩きましょー「おいお前……？」

いきなり後ろから声がしたんで振り向くと、
其処には一人の、

いかにも盗賊業やつてます！と言つて居る服装の、俺と同じくらいの歳つぽいボーイッシュな感じの少女が居た。

「何か用ですか、盗賊さん？」

「なつ！ なんで私の事が盗賊つて分かつんだよ！」

「いやそれは、誰がどうみても貴女の服装が盗賊！つて感じなのド

「……よ、良くなつたな！ 今のはお前を試したんだ！」

胸を張つて冷や汗かいて答える盗賊少女。

「それで、もう一度聞きますが何の用ですか？」

「あー それだつた！」

「ホン、

お前の有り金、全部置いていカーーー！」

「…………」（俺）

「…………」（少女？）

「…………」（俺）

「…………」（少女？）

「…………」（ハア）

「なー 何溜め息ついてんだよー！」

何か変かよー。」

「武器も無し、しかも相手に既にばれてこる迷惑」

「あ……武器はー、えつと……」

「……」

「す、すみませんでしたあー。」

「ハア……まあ良いよ。

けどさ、むしろ少し観察眼を磨いた方が良いんぢゃない?」

「?」

「俺、無一文だよ?」

「ううん――――――――――」

「嘘ではない。何を隠そう俺は金を持っていない。

それは普通なら道具、その他諸々買うのに金がいるが、
お前なら大丈夫だろ、とこづマスターの短絡的判断によつ、無一文
なのだ。

因みに、田の前では少女が○ーNしている。

「またぐ、もう少しこうのま止めとこてくれよ……」

「う、うせー。私は絶対お前から何か盗つてやる。」

「はーはー。じゃー。」

そう言い残し、俺のできる限りのスピードで、走る。絶対に逃げきってやるー。……なんで逃げてんだ？

思いっきり、100m12秒フラットなペースで走る。

ちゅうと後ろを振り向くと、

「おーああああああー。」

女子特有の高い声を響かせながら、鬼神の如くじゅうじゅうに向かって……

「逃げるー。」

「あー。待てーーーーー。」

だからなんで逃げてんだ俺？

第十一話 疾走爆走（後書き）

めだかボックスって面白いと思いません？

（何をいきなり言つてるんだ作者は^{ハイシ}）

第十一話 兄妹誕生！

「ハア……もう追つてこないだろ…………」

しばらくあの盗賊少女からの逃避行？を続けてたら、いつの間にか居なくなっていた。

多分体力が追いつかなかつたのだろう。

「つて！ そんな訳あるか！」

「つねわー！」

もう人気がまったく無くなつた道で、いきなり草陰からアイツがでてきた。

「やつと追ついたぞ！」

「で、本当に着いてくるの止めてくれないか？

俺がこれから行くと「ほた、ちょっと危険？地帯だから……」

「ふん！ だから何だつてんだ！ 私はお前から何か盗むつて決めたんだよー！」

そんなに離れて欲しかつたら何か寄越せー！」

「…………言い分が理不尽すぎで逆に呆れるな…………」

「なんだとー！」

「まあまあ、落ち着いて。

えーと、今此処は……はー？ もうこんな所まで来んのかよ！」

地図で大体の場所を確認すると、もう既に、道のりの半分弱いつていた。

つて事は、俺とローリーの追いかけっこはフルマラソンだったのかよー。

軽くショックを受けてる俺の様子に気付き、少し思案顔で近づく少女。

「おー……お前、何か顔色わりーぞ。大丈夫か？」

「ああ。大丈夫。

ただの追いかけっこ？ がフルマラソンだった事が軽くショックだつただけだから……」

「ふるまじさん？」

「ああ、じつはマラソンって無いのな。
まあ良いや。

……で、本当にここから先行く所は、お前じゃあすぐ死んでしまう様な場所だ。

わつわと諦めて、わつわと家帰れ……

「ねーよ……」

「ん？」

「家なんかねーよー！

私はああ、一家全員皆殺しにされて、帰る所なんてねーんだよ！」

「！」

「ちくしょお……バカにしゃがつて！
俺は絶対生き延びて、あいつらに復讐してやんだよー。」

「…………」

「だから絶対、今は生き延びてやるー。」

「コイツは……似てる。

記憶にある俺と紫の家族。

親の顔。仲良く遊びに行つた日。

そして殺された日。

「コイツは、俺と似てる。

違うのは、その後どうなつたかという事。

俺は記憶を消され、のんびりと暮らし、
片やコイツは、少しでも多く生き延びる為に動く。

「そつか、そうだったのか……」

「んだよー。変な同情なんてしたひがつひがつ……！」

「気付けば俺は、俺より少し低いぐらいの彼女を抱きしめ、
囁いた。

「大丈夫。大丈夫。俺がいるから。この世界で、お前は一人じゃな
い。」

だから、もう安心しや。もう強がりなくていい。」

「！」

でも、私は、私の生き様を変えるつもりはねえ！」

「いいんだよ！」

お前が考え、お前が決めたならそれでいい。
それが死に様じゃあるいはならなんでもいい！

だから…………」「…………」

俺は彼女から離れる。

そして、言ひ。

「俺の家族に…………俺と一緒にこひぜー。」

「！」

だ、誰がなるかよ！ そんな…………いきなり…………。

で、でも、その、ありがとひ…………

「フフ、良いんだよ。

よし、これから俺がお前の兄だ！ 何でも言へー！」

「はあー！ 普通私が年上だろーー！」

「いや、俺が年上だと想つ

「んだよー。じやあお前何歳だよー。」

「… 私は14…」

「じゃあお前が妹な。よろしく妹！」

「たつた数ヶ月の違いの癖に……」

「まあいいだる。さ、俺の妹でいいなら行こつか。

これから行くところは危険だけど、俺なら大丈夫だから。

……で、お前は何か武器持つてないのか？」

「…………」

「お前、まさか…」

「よし！ 行くぞ兄！」

「誤魔化すな。

「… ハア… お前よく盗賊とか復讐とか考えれたな…」

第十一話 兄妹誕生！（後書き）

私が書くと、
頭の中のシーンはいいのに、
文力（ぶんりき？）ゼロな、とても軽いものになる！
俺はダメだあー！

第十二話 和む

まあ、いくら何でもこれから行くのは『遺跡』だし。

難易度（難）くらいなダンジョンだから、
結局、道程にあつた小さめの町で、軽い短剣と、ナイフ複数を買つ
てやつた。

100？も歩くのだから町が無い方がおかしいのだが。

それと、金？ そんなの途中で変な魔物いくらか狩つて、即換金で
すよ。

本人によれば、

「私は……えーと……短剣とか……ナイフぐらいなら使えるん
だ！」

らしい。（真偽は定かではない……）

しばらく歩く。

歩く、歩く、歩き続ける。

……

やつぱり歩く。

人気が無い所から、町に近づき人気がまあ増えて、また人気が減つ
てきた。

けどまだ歩く。

妹がいるので超能力は使えない。

だから歩く。

「…………」

「…………」

「だあ――！ いつになつたら着くんだよ！
なあ、いつになつたら着くんだよ！
なあ、いつになつたら……」

「うるさい……」

！ なんだよ……あとどれぐらじか教えてくれても良じいじゃねーか

よ……」

「あと300？」

「はあ！？ どんだけ歩くんだよ！

兄の目的地つて何処だよ！？」

「…………『遺跡』…………」

もつづるさへなつてきたので、素直に行き先を教えてやる事にして、
ボソッと呟いた。

だが……

「ええええええええ！」

「女が大声出すな。はしたないぞ」

「いやいや、ここからの『遺跡』つていつたら、
あの『スラローム遺跡』だろ！？」

『冗談じやねえ！ 何で私がそんな危険地帯にホイホイ行かなきゃなんねーんだ！』

「……そっか、どうしても行きたくない？」

「あつたりまえだろ！」

「……じやあいこよ。

俺だけでさつさと行つて、帰つてくるから。
だから妹はここで待つて」

「え……」

「じやー。」

そつ言つて、後ろに視線を感じながら先へさつと進む。

妹（名前は非公開）SHDE

「あ……」

本当に行っちゃったよ。

鳥の鳴き声だかなんだかしてすうげえ怖いんですけど！

「え、嘘でしょ？」

アイにい

7

まあこ。まあこよー。本当に置いてかれちゃったよー。

„עֲמָקָם־עֲמָקָם־עֲמָקָם־עֲמָקָם

いや、今からでも遅くないはず！

「待つて、兄！」

そのまま兄の行つたと思う道を追いかけ、走つた。

妹 S I D E E N D

「待つて」

ん?
後ろから妹の声が聞こえる。

「どうした？」

「そ、その！
やつぱり兄には私が居ないと、その、駄目だと思つたんだよ。
だから、私も行くよ！」

「はい？」

「だ・か・ら、私も一緒に行つてあげのつて言つてんだよ、『遺跡』
に！」

顔を真っ赤にして強がる妹。

はあ……しようがない。

「分かつたよ。頼りにしてくれるよ？」

「あ……ああ！ 任せたぜ！」

「こつやあ『遺跡』でも心労が増したな……。

第十二話 和む（後書き）

心に立つ三本柱は友情・努力・勝利じゃない。
無慈悲・理不尽・超最強だ！

第十四話 潜入捜査（前書き）

今回も特に何もない回です。

第十四話 潜入捜査

「はあー、ここが『遺跡』かー」

前は怖がってた癖に、『遺跡』の前で感嘆の声を上げている。

「ほら、はやくいくぞ」

「あ、ああ、分かったよ……」

二人で、『遺跡』の土地の中に入っている。周りは廃墟で、俺の知ってるのと違うのは、建物が全て石造りの簡単なもの所だ。

本当に、遺跡！っていう雰囲気だ。

歩いていく中で、色々な建物に入つて行き、そこにある石碑やら文書やらを探すが、まったく見つからない。

「なあ、本当にここに兄の捜してるものあるのか？」

「ああ、ここにあるはずなんだが……」

しかし変だ。

建物は、元々崩れているものばかりだが、誰かが通った形跡がいくつかあつた。

そして、何処にも見つからない古代品。

更に、極め付けは、

「魔物がいない……」

「そう！ 私も思つてたんだけどやー、ここ一応じゃなくても『遺跡』でしょ？」

強い中位上位の魔物ぐらい居るはずなんだけど、さつきから、一匹も居ないよ？」

そう。先ほど遺跡に入つてから、まったく魔物と遭遇していない。だが、戦闘の後も無ければ、魔物の死体も無い。

これはつまり、魔物が自分から移動？ それか人為的に移動させられたのか？

だとしたらその首謀者は何を企んでいる？

「なあ、魔物を統率できる奴か魔法つて無いのか？」

「はあ？ そんなの居るわけないじゃん！」

魔物つて知恵も何も無いって事は兄だつて知つてるでしょ？」

「そうなんだけどなあ…………」

「あつ！ そんな事より、ほら、今までで一番大きい建物があるよ！」

前を見ると、今まで歩いて見てきた遺跡つていう雰囲気の建物が、まるで掘つ立て小屋に見える程の建物、いや、世界遺産登録済みの中の文化遺産の神殿ですか？

と思いたくなるようなものが立っていた。
今までのものより数十倍は広い。

「「怪しい」」

妹と考えがハモった。

まあそれはいいとして、明らかに、古代呪文「ひかり」
つてバーゲンセールしてる様な感じだ。

「まるで古代呪文のバーゲンセールだな……」（b.y.b 一タ）

「……捜してみる?」

「ああ……よし、行くぞ!」

何も罷つぽいのが無いのを確認して、でかい扉をゆっくりと開く。

扉を開けた先は、一本道の通路で、奥まで光が届かず、真っ暗にな
つている。

「ねえアイ兄……

「なんだ?」

「ひつひつ展開つて、だいたい最終場面だよな?」

「……同感……」

果たして、アイ達は大魔王（偽）を倒せるのか!?

つ
て
か
?

第十四話 潜入捜査（後書き）

次回、戦闘あるかもね！？

第十五話 逃走済！

「ここまで続くんだよーーー！」

「はあ、本当に何処までなんだろうな？」

今、俺達は遺跡の神殿？内部に潜入している。最初の扉から入ってずっと一本道だったのだが、それがまだ続いている。
もうかれこれ一十分ぐらい歩いた気がする。

「まつたくさー！ 兄の捜してるものって何なのーー？」

「……だからそれは言えな「お兄ちゃん……お願い教えて……」

グヴアハアつ！

あい のせいしんに 1652 のダメージ！

あいははなぢじょうたいになつた！

「す、すまん！ 教えるからー。
あ！ 泣かないでえー！」

男（兄）には、嘘無きと分かつていても、女（妹）を泣かせちゃいけねーんだよ！

「かくかくしかじかで、『にょ』にょなわけ」

「…………もう何があつてもおどろかねーよ…………。

ということは、この奥にその天魔属性の魔法について記された書物があるかもしだねーのか……

「そつ。他の所には不自然なまでに無かつたから、考えられる状況は三つ。

一つ目は、盗賊やら何やらが来て、根こそぎかづぱらつて行つた。

二つ目は、魔物でも操作できる程の人為的な奴が、全ての書物、魔物を何処かに集めた。

そして三つ目は……

ゴクッ……

「み、三つ目は？」

「三つ目は、最初つからここに書物なんてない！」

「それじゃ意味ねーじゃんか——！」

グオオオオオオオ——！

「…………」

「…………」

「…………いやー、妹よ。お前つていつ魔物と声を合わせるよつこなつたんだよ~」

「…………いやー、妹よ。お前つていつ魔物と声を合わせるよつこなつたんだよ~」

「つてー わい！ そんな後ずさりしながらよそよそしくなるなー。
つーか魔物なんて知らないぞ私…………は…………」

「ん？ どうした？」

妹は俺の後ろを指差し、アワアワと口を開いて、焦っている。これ
も良い顔だな。

「あ、後ろから、つてえ！ もう間に合わないよー。逃げるが勝
ちだー！」

あれ？ 妹よ、君は何処に行くんだい？

俺達が進んできた方向そのまま奥に走っていく妹。
そんなに急ぐ事あつたか？

ふとさつきの発言が気になつて、今まで来た道を振り返るとそこには……

魔物がウジャヤウジャと、めんどくさい数がいた。数え切れない。つ
まり無数。

魔物が大群となつて、まるで獲物を食い尽かさんともあらう勢いで
走つてくる。

小さいものは、鼠型下位魔物から、大きいものは竜系統の上位魔物
まで多種多様だ。

「ん？ 待て待て、今俺はなんと言つた？」

「竜系統の……上位魔物おーーーーー？」

もう数十メートル前まで迫った魔物から視界と体の向きを反転させ、ダッシュする。

「ちくしょお——！ 何なんだ！」

魔物と一定間隔があいている状態をどうにか持ち応えながら、妹に追いつく。

「やあ妹。大丈夫？ 疲れてるみたいだけど？」

「ハア、ハア、はつ、分かってるならどうにかしほお——！」

「……いや、だってわ、上位の魔物もいるんだよ？ しかも竜系統

「とにかくどうにかして——！」

「…………（作戦思考中）」

ピンポン

「これ、だあ——！」

叫びながら走っている体をいきなり急回転させる。

そして、服の右手のスリーブ部分についているボタンを外す。

バサアッと右手がその機械でできているメタリックシルバーの光沢を輝かせる。

そう。科学の力でできたこの世界には無い反則。イニギューラー

「それでも……」

右手の上腕部から手投げ手榴弾五個程を出す。
そしてそれを魔物の前方に投げる。

卷之三

更に、右腕前方から、持つている武器の中で極めて凶悪な、毎秒五発という無茶苦茶な機関銃の機能を使う。

その大量の数え切れない弾丸は、硝煙を撒き散らし、籠物の体を数秒で穴だらけの粉々こする。

そして、その内のいくつかは、
投げた手榴弾にあたり……

タイムラグがあるはずの手榴弾をすぐさま爆破させる。

それでも、油断できない。

機関銃の激しい銃声の中で、微かに聞こえる薬莢の金属音。そして、その弾幕の中で動くものが見えなくなり、音も静かになつてきた頃に、機関銃を止めた。

「ふう…………。

やつぱこれ疲れるな…………」

まあ反動も来るつちやー来るものだし?

「な、なななな何? 今の一!」

俺の前には、小さかつた魔物は粉となり、大きい魔物はただの肉片と化していた。

結構グロテスクな画だ。

「お前、これ見ても大丈夫なの?」

「はつー? あ…………」

バタリとその場で気絶してしまつ妹。

……そんなんで闘えるの!?

まったく、つくづくおいしー奴である。

第十五話 逃走済！（後書き）

この頃あとがきで書く事ない！

あ、皆さん安心してください！
妹の名前は決まってるんで！

なんとなく名台詞。

『地球は俺にとつて小さすぎる。

太陽でよつやく偉大なる俺に匹敵しようつ

.....』

b Y王

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）（前書き）

外的魔力適正属性とは、外的魔力を使って行使する弱体化した魔法のなかでも、

その人がとりわけ強く行使することができる属性。

基本的に、外的魔力では光や闇は無理。

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）

アイ・M・ウィルドレース

本名は、異世界から何故か來てしまつた御神哀。
とてもない女顔で、体も、男で言つてはいるの華奢、線細。女で言
うところのスレンダーな感じだ。
でも女に間違われると、男に対しては制裁を下し、女に対しては怒
鳴るだけ。（だけ？）

アイが名前。Mはミカミ。この世界ではミドルネームとして名乗る。
ウィルドレースは、アイがいつもマスターと呼んでいる人物の苗
字である。

内的魔力属性・天属性、魔属性

外的魔力適正属性・火属性、水属性、風属性、土属性、光属性、闇
属性

魔法は、内的魔力である天、魔属性は、未だ魔法の名称すら不明。
外的魔力適正属性では、全属性を中級魔法まで全て余す所無く使え
る。

しかし、一応は外的魔力によるものなので、混合はできない。

その他・元の世界で培つた最強の超能力一（作者が思つた）である、
『マテリアルコントロール
祖体制御』がある。

詳細は『In The Material』の全登場人物能力
表に掲載。

右腕が義手であり、神經と機械神經が接続されているので、某鍊金術師のように自由に動かせる。

見た目はター・ミネーター + 外骨格。

機能として、『抹殺のラスト・リセット』もどき、機関銃、小型ミサイル（一発きり）などがある。

「はつきり言って超能力+魔法って最強ですよねー？」ｂｙ作者

アリア・Ｍ・ノーヴィス

アイから身包みは「」としたけど失敗。つい自分の身の上を話し、アイも自分と同じような境遇である事をしる。

それから色々あり、アイの提案により、アイの家族（妹）としている。

本名は、アリア・ノーヴィスだったが、御神の妹なので、Mを貰つた。

はつきりいつて名前と性格がまったく合わないキャラ。

性格は、男勝りで生意気な喋り方だが、体の発育は中二とは思えない程引き締まって、

作者から言わせれば、美「」……「ホン」「ホン」……の糞である。

けどやっぱり女の子なので、グロいのは苦手で、見たら氣絶する。

本人曰く、

短剣やナイフぐらいの武器だつたら使えるらしいが、

戦つたところをアイが見た事があるのは皆無。

内的魔力属性・水属性、風属性

外的魔力適正属性・火属性

内的魔力の魔法は、意外と優秀で、風ならば、ギリギリ一発風の上級魔法を撃てるらしい。しかし、撃つたら体力と魔力の消費が激しく、一日は撃てないそうだ。

外的魔力適正である火属性は、多少威力は下がるが、中級の最初の方なら使える。

魔法では全体的に、足腰を強化する魔法が得意。その素早さで敵を翻弄する。

ギルドマスター

苗字はウイルドレース。

見た目や喋りはともかく、雰囲気が総隊長さん明るいヴァージョンな感じで、

アイに多大な安心感と親近感を感じさせる。

今のところは、名前は誰も知らない。

世間では、ギルドマスターとウイルドレースとしか呼ばれていない。名前はアイでも知られていない。

アイは、マスターと呼ぶ。

これには意味がいくつかあり、

総隊長と同じようなニュアンスの、ギルドマスターから、マスターをとつているのと、自分を更に鍛えてくれる、尊敬するものとして、マスターと呼んでいい。

後は、名前が分からぬし、苗字も長いから。

内的魔力属性・火属性、土属性、光属性

外的魔力適正属性・水属性、風属性、闇属性

勿論、ギルドマスターなので、内的魔力の魔法は全て上級まで使える。外的魔力でも、まったく威力を落とさずに中級魔法レベルを撃てる。

光属性を持ちながら、なぜか突然変異でしか生まれることの無い闇属性を外的魔力で行使できる。

このことはアイもまだ知らない。

こいつも意外と最強だった。って、そしたら『最』じゃねーじゃん。

登場人物紹介（主人公、妹、マスター）（後書き）

どうでしたか？

何か誤字、矛盾、疑問などあつたら教えてください。

第十六話 ディアボロス（前書き）

いきなりシリアルスパート突入。

第十六話 ディアボロス

俺は今、妹をお姫様だつゝして、また更に奥へと向かつてゐる。

「つ……此処は……」

「おう。起きたか？」

「つて！ 何でアイ兄がこんなつ……つーか離してつー！」

「あ、ああ……（俺の事やっぱ嫌いなのかな……）」

「まつたく。いくら妹とはいえ寝てる間にお姫様抱っこはねーだろ！
(あ～、恥ずかしい！)

相手は兄だぞ。義理でも兄だぞ！ まつたく、すげー恥ずかしいー
！」

「……そーだな……（ハア……俺つて……）」

何かとこきなり齧語が生じてる兄妹だった。

「つて、それよつまだなのかこの道は。
いつまで続くんだろーな？」

「いや、少しだけど風が複雑に動いてる。

多分出口があると思うよ～、それも風が行き来できるはずの

「ハア！？ 何で風の動きなんて分かるんだよ兄はー！」

「いや、それは……訓練の賜物？」

「……嘘っぽいけど、まあいいよ。それじゃお嬢ちゃん。」

そう言って走り出す妹。

実を言うと、妹に話したのは、マスターに拾われた事と、属性のことしか言つていない。

さつきは危なかつた。風の動きは、超能力で一番最初に基本として使い始めたものなので、つい自然につながってしまう。

右手の事も、
気絶してうまく忘れてくれたようだ。

「あ！ 待てよ！」

紫、俺は異世界でこんなに幸せで良いのか？

つて、似合わずシリアスな気分になつた。

この議題はまた後。

今は、まずは妹の幸せ優先。俺も、帰るために強くならないとな。

「あー、おい兄ー、あれ見りよー、出口だぜー。」

「あ、ああ！ 行くか！」

考え方をしながら歩いていたら、いつの間にか凄く進んでいたらし
い。

正面50m程で通路が途切れているのが分かる。

俺達はそこに走っていく。

そしてその出口から入った部屋で、

俺達は『異常』に会つた。

俺達は一瞬で体が動かなくなつた。

妹は、体をガクガクと震わせながら、青ざめた顔でソレを見る。

その『異常』は、黒くて、黒くて、黒かつた。

体全体が光を取り込むかのように闇が広がつていて、
手には爪らしきもの。

足もちゃんとあつた。

勿論、頭もあり、目と思わしき場所は、赤く紅く光つていた。

それは、形だけなら人間だつたのかもしれない。
しかし、やはりそれは『闇』だつた。人ではない。

記憶の中で、この『異常』と同格の人間を見たことがある。
そう、ホムンクルス達だ。

その見た目からは創造できないような闇を撒き散らす狂氣。

でも、それは、一応でも人だつたから闘えたのかもしねり。

だが、目の前にいるモノは、人ではない。

その異常は、闇の中で、口を開いた気がした。

『これも、運命か！

ここに跳躍者と天使の末裔が同時に来るとは、なんと幸運か！』

低い、少しノイズが掛かった声が部屋に響く。

跳躍者？ 天使の末裔？

なんのことだ？

俺は脚の震えを気合で直し、『異常』に聞く。

「お前は……なんだ？」

『そりか。 跳躍者には名乗つておこう。

私はデイアボロス。 悪魔だ。 ……天使の末裔にはいらないな？』

隣でビクッと震える妹。 こいつと妹は、会つた事がある？

「……その、デイアボロスがどうして此処に？」

『そんなもの、これから滅する者には関係あるまい』

「チイツー！」

俺は、悪魔の、『滅する』といつ言葉を聞いて、恐怖した。

脳が警告する。

こいつには、絶対に殺される。戦つてはだめだ。

ホムンクルス達なんて目じゃない！

悪魔は、口調だけでは分からぬかもしれないが、確かに悪魔が悪魔たる所以が感じられた。

だから、俺は逃げる。

俺は死ぬわけにはいかない。しかも、妹を死なせるわけにはいかない。

俺は妹を抱え、扉の外へ走った。

「絶対に、殺されてたまるかっ！」

第十六話 ディアボロス（後書き）

主人公は死に怯える。
それは昔の経験から。

第十七話 『跳躍者』対『王』（前書き）

主人公のキャラが違いますが、
これは必死になつてゐるだけなんであしからず。

第十七話 『跳躍者』対『王』

勢い良く外側から扉が閉まり、ガチャリと音を出した。

畜生、こつちは命が掛かつてんだぞ！」

「アイ兄……」

『わあ、我、悪魔の王ティアボロスと殺しあおつー。』

ガンツ ガンツ ガンツ

いくら叩いても、魔法を使おうとしても駄目だ。

『無駄だぞ跳躍者。その扉は魔法無効化の呪いが掛かっていて、私も開けれん』

「うるせえ！ これならどうだ！

能力使用！
対象は扉！

破壞

使いたくなかったが、超能力を使う。

しかし、扉は砕けない、融けない、開かない。

何かに弾かれた感触がした。

「なつ！ 超能力も魔法と断定されんのかよー？
この扉何でできんのだよー！」

「アイ兄……ごめんね。私のせいでこんなことに「つるせえー」！
？」

「妹……いや、アリアのせいじゃねえ！
これは俺の問題だ！ 俺が処置する！」

おいディアボロス！ お前が本当の王ならその器に免じて一対一の
勝負と行こうじゃねえか！

俺の妹……しらないうが、お前の言う通りの天使の末裔には手を出
すな！」

『ハツハツ！ この状況で面白い事を言つ！ たすが跳躍者！
まあ、挑発と分かっていても私は王だから。
一人を滅せればそれでいい。いいだろう！ 私も良識ぐらいは持ち
合わせていろぞ！』

「はつ！ どつかのRPGと違つて器が大きいな王！」

俺は妹を扉の傍に座らせる。
そして、魔法をかける。

「光の精靈、我に答えよ。そして頑強なる盾、ここに顕現せん！
『シャイニング・ヘキサゴン』！」

六角形の形をとる六つの光の柱がアリアを中心に立ち、

そしてその柱から光の線が伸びて、複雑な六芒星を形作る。

「えー？ アイ兄！ 何これ、そっちに行けないよー…？」

「これは光の盾の中級魔法。

だけど外的魔力で俺が操れる最高の量を入れたから、上級魔法にも耐えられるはずだろ。

そしてそれは外と中の接触を遮断する盾。外からは勿論中からも外にでれない。

……待つてろよ。きっと助けてみせるー。

俺は振り返り、ディアボロスと目を合わせる。何か吸い込まれるような恐怖の感覚が支配する。

「待たせたな、始めようか」

『ククク、それぐらい、待つたとも言わんよ。それより本当に良いのか？

今なら天使の末裔を差し出せばお前を助けて「黙れー」……お前には必要の無い問答だつたな！

悪魔の王相手に恐怖は無いのか？』

『ディアボロス
闇が嘲笑しながらこちらを見る。

「怖いよ？

お前の言うところの跳躍者だつて、勿論普通の人間だしな。だから俺は、アリアを死なせない為に、俺が死ぬ！

『良い根性だな跳躍者！ その無駄な足掻きを見せてみろー。

先攻は貴様にくれてやるー!』

「言われなくともな!」

体全体に強化魔法として、外的魔力を染み込ませる。そして更に超能力を使い、背中と足に不可視の風の翼を出し、体全体も風で覆う。

「超能力者兼魔法使いを舐めんなよ!」

火の精靈、我に答えよ。そしてその大いなる聖火、仇為す者を焼き払え! 『ボルケーノ・ブレイド』!』

火の剣を出し、右手で持ち、左手は、風の不可視の剣を握る。

「いくぞオ!』

その瞬間、俺は音速に迫る速度で、相手に向かつた。

第十七話 『跳躍者』対『王』（後書き）

「ディアボロス。」

普通の敵と違つて良識あります。

作者は思つた。

RPGとかにでてくる大体の敵つて、悪意バリバリじゃね？

俺は敵も、味方と同じぐらいちゃんと書きたいんだ！

第十八話 魔の闇と天の光（前書き）

主人公キャラ崩壊。

敵と仲良くなるパターン。

この状況でなんでこうなるの！？

に、ご注意ください。

尚、一部意味不明な事をいくつか口走りますが、
深く考えず、「そーなのかー」って感じでお願いします。

第十八話 魔の闇と天の光

「ウオオオオオ！」

右手の火剣で切り込み、それと同時に風剣で突く。
そして風剣を突いたままなぎ払い、そして火剣を戻す。

それを体感時間僅か0・4秒でやつたはずのに、
少し体を動かすだけの必要最低限の動きでかわす闇。

だが、まだだ！

「ハアっ！」

無詠唱による水属性の中級魔法。
水が刃物同然に硬化し、闇に向かう。

『こんなものか跳躍者！』

しかし闇はまた最小減の動きでそれをかわす。
見ていてこっちがイラつく戦い。

しかし、その油断の隙に、闇の後ろに回つて火剣と風剣を一気に突き出す！

そして両方を反対方向になぎ払い、そして更に連撃を加える。

と、その瞬間。

ガシッ！

「なつ！」

火と風でできている筈の剣が闇から出た手に掴まれ、

バキイツ！

砕けた。

『遅すぎるぞ跳躍者！

もつとだ！ もつと王を楽しめろ！』

「俺が遅い！？ 俺が slow !？
そんな馬鹿な！」

『次はこいつらの番だ！

現世に存在する根源に宿りし全ての闇よ。我、悪魔の王に従い、敵を討ち滅ぼせ。

『ブローカン・ワールド』！

瞬間、世界が歪んだ。

そして闇が俺に覆い被さる。

闇が俺の中に入つてくる感触。

肉眼には、世界は黒くなつたように見えた。

何もかも黒い、闇の中で一人いる感じ。一筋の光も、一縷の望みも無い世界。

「ははッ、何だよこれ。『ティアボロス！　お前何をしだッ！？』

腹に感触。

見るとそこは、

「んだよ、これ…………」

俺のナ力から、闇が突き出ていた。

闇は、先を尖らせて、槍のようにして、俺の体内から外に突き出ていた。

それが何本も何本も。

それを認識すると同時に襲い掛かる地獄同様の痛み。

「ああああああ、あああああ！　がああああ！」

『言つたまう？　跳躍者。貴様ではこの悪魔の王『ティアボロスに勝てる事はできん！』

「ガ……ハ……アアガ……

う、るせえ！　俺は、妹を、アリアを、護らなくちゃならねーんだよ！

例え、お前と絶対的な差があらうとも！

オレは、諦めねえ！

現世に存在する根源に宿りし全ての光よ。我、世界の跳躍者に従い、敵を正し滅せよ！

光の幻想、『ファンタズム・ホーリー』！

その瞬間、闇に表れる光。

その神々しい程眩しい、後光のような光は段々世界（闇）を侵食、破壊していく。

まるでガラスが割れるように、次々と闇が砕ける。

『貴様！なぜその詠唱を知っている！？

それはこの世界では失われたモノのはずだ！』

「……分かつてねえよ闇！ 分かつちゃいねーなア！

俺は知ったんじやない！ 識つたんだ！

失われた天属性、魔属性の詠唱。

お前が悪魔の王と聞いてから、お前自身が魔属性の魔法を詠唱する

事を待つてたんだよ！

後はそこからヒントを得るだけだ！

お前のミスは唯一つ！ 俺の『能力』の意味を知らなかつた事だ！
だから教えてやるよ。

俺の能力は、『識り』、『解して』、『創る』事なんだよ！

『フツ、跳躍者の定め、か。

いいだろ？ その定めの中から、抜け出してみろ！ 跳躍者…』

「いちいち王に言われなくとも分かつてんだよ！

お前とは良い戦友になれそーだつてのに！ お前の性格ビーにかし
るつづーの…』

『論外だな！

王は、王故に、この意思は何人たりとも曲げられん!』

「ああそーかよ! ならいくぞ王!」

跳躍者、御神哀!』

背中に風でできた不可視の翼、
火でできた燃える翼、

石でできた無骨な翼を付け、風を纏い、火剣を構える。

『愚民に言われずとも!』

悪魔の王、『ティアボロス!』

闇から八対十六枚の黒い翼を出し、
闇そのものを固めたかのような剣を両手に持つ。

『護るべき者の為!』 『己が信念の為!』

その一人は、さながら、古典的な、
勇者と魔王の決闘のようだった。

『『――人の戦を、始めよつ!』』

第十八話 魔の闇と天の光（後書き）

なんかもう最終決戦みたいな空氣ですが、
違いますので、注意ください。

まだ年月たつてないし、学校にだつていってないですよ！？
キーワードに学校つてあるのに！

何かどうしても戦闘パート書くとめちゃくちゃな文になる。
魔法名がありきたりのシマラナイトのになるー
だめええ！ 見ないでええ！

第十九話 矛盾探索

「う、お、あ、ああああああ……！」

身体能力強化を体全体、最大限に使用し、脳にも強化を掛け、『並行思考』で、一瞬で次の一手の様々な手段を考える。

いや、考えるしかない。

一瞬でも、カンマ一秒でも気を抜けない危機感と重圧。それほどまでに、『悪魔の王』という存在自体が規格外。

「ツ！」

咄嗟に一步下がる、と同時に俺の前髪を掠る黒い塊。

『今のを避けるか！ ならば…』

黒い塊が一本一気に上から落ちる。

それを理解した瞬間、反射によつて火剣で受け止め、弾く。そして後方に下がり、大勢を整える。

パワーも伊達じゃない。

……こりやちょっとヤバイかもな……。

闇は物質では無いので、超能力で操る事もできない。

無詠唱で岩石の槍を複数創り、超能力で思いつきり投擲する。ふうじぱす

しかし、相手は避けようとしない。

「なつ！？」

『こんなもの、闇には効かん！』

岩石が闇に当たった！と思つたその時、それは通り抜けた。比喩ではない。幻覚でもない。

そう、今思えば相手は『闇』そのもので構成されたもの。固体ある『物質』が、そもそも形すら無いはずの『闇』に効くはずが……

そこで俺は、違和感を感じた。

形すら無い？ しかし相手は形を作る。物質が効かない？ ならなぜアイツは其処に立つ？ なぜ俺の剣戟を防ぐ？

考える。相手は魔属性魔法を放ち、そして俺は天属性魔法を撃つた。そしてそれは、確実にアイツに当たった。

『並行思考』で、剣戟の手を休めず、尚且つ思考する。考える。俺の魔法は効き、魔法剣を防ぎ、だが唯の石は当たらない。そして、『闇』が当たる俺の体。

この共通項は？

『こんな時に考え方か跳躍者！

もうこれでお前は終わりだ！ 今だけなら特別に拌ませてからドームを刺してやるついで』

いつの間にか俺より上にいる相手は、剣を一つとも捨て、両手いっぱい横に広げる。

いちいち魔力感知しなくても分かる！この魔法はヤバイ！早く『答え』を……

『虚無に存在する矛盾の力よ。

我、世界を纏めし四人の末裔が一人、ディアボロスに従い、他の者を消滅せしめろ！

極死の糾弾、断光の闇『デストロイ・オブ・ザ・クライスト』！

世界が、いや、今この場所が、俺の目の前が『闇』で支配され、そして、碎け、消滅していく。

何もかもが消えていくこの場所。その光景は、聖書にある審判の時にも見え、

しかしそれよりも禍々しい何か。

言葉では表せない、人というちっぽけな器では何も出来ない絶対的な力。

「……俺は最後まで、諦めねーぞ！」

考える！今はそれだけしか出来ない。魔法なんて終焉の前では意味が無い。だから今は、考える！

「俺は！絶対に死なねえつつってんだろうがあ！」

瞬間、闇が、魔が、悪が、光を拒絶する『全て』が、俺が今居る此処を覆つた。

第十九話 矛盾探索（後書き）

計算も何も無く、ただただ伏線をはりまくる作者。

その伏線に気付く人は……居ますよね普通に……

次回、最終回では有りません。

第一十話 疑問追求

ディアボロスSIDE

『……もう終わったか。跳躍者よ。その強さ、我が認めよつ』

これで一人目。

だが、今はまだ王の尊厳にかけて、天使の末裔には手を出せんが、まあいいだろつ。

もう一度魔力反応をこの広大な部屋の隅々まで確認する。

今この部屋内にいるのは、我と天使の末裔のみ。

跳躍者は死んだのだろつ。

『世界を纏める四人の末裔。悪魔の王といつのも、跳躍者も、難儀な関係だ……』

そしてこの借物の闇を霧散させようとしたその時、背後でパキンと、何かが割れる音がした。

闇をまた収束、取り込み、後ろを振り向く。

そこには、防壁に使われた魔力の残滓と、その光の中で泣く天使の末裔。

「なんでお前は！ ディアボロス！ また私の家族を！」

『止めておけ。まだ『覚醒』も済ませていない天使の末裔など、王

の前では唯の塵程度。

折角、戦友の跳躍者のお陰で助かつた命だ。
また我に取られるまで大切にした方がいいぞ?』

「！ 殺す！ 絶対に殺してやる！』

『……残念だ。跳躍者との盟約だからな。生かしておいつと言つたら良いが、

王に危害を加えると言つならばそれなりにやらなければな』

「ちょっと待つてくれねーかな？

それにアリア！ お前だつて女なんだからそんな乱暴発言禁止！』

「！？』

『な！ ！Jの声は！ 跳躍者！』

なぜだ！？ あいつはもう死んだはずでは…………。

声の主へ視線を向けると、そこには、死んだとばかり思つていた跳躍者がいた。

ディアボロスSHIDE END

あ～あ～、！Jか？カミ小隊。HQ、聞こえますか～。

……今俺は瓦礫の下敷きになつてゐる。

まあ、右腕を上にして支えてるからいいけど。

瓦礫から這い出ると、すぐ正面で妹が凄い剣幕でディアボロスに殺す！って言つてる。

そしてディアボロスが微妙に殺氣を出し始めた。

これはヤバイな。約束も何もない。早く助けるしかない！

「ちょっと待つてくれねーかな？

それにアリア！ お前だつて女なんだからそんな乱暴発言禁止！

「！？」

『な！』の声は跳躍者！』

「おいディアボロス。俺との約束はどうした？
それとも今は俺が生きてる説明をするのが先か？』

「アイ兄……生きてて良かつた……』

『……なぜあの魔法をくらつて生きてる？

お前は確かにあの時確かに魔法の着弾地点にいたはず……』

また戦闘態勢になつて警戒するディアボロス。

「ああ。俺も考えたよ。

あの魔法は何もかも規格外。詠唱も一瞬で俺には真似できないと分かつた。聞いた事もない。

だが、お前は矛盾を残しすぎたんだよ』

「一つ、お前の体は『闇』そのものを収束させたものに過ぎない。これに至った原因は、ただの石がお前の体に当たらなかつたから。お前の体に当たらないということは、お前の『闇』は、闇そのものを物質化したものではなく、収束させたもの。

そしてそれからまた矛盾が生まれる。

二つ目、お前は俺の攻撃を防ぐ。これはなぜか？
闇ならば俺の攻撃を防がず『透過』させ、俺をメッタ刺しにでもすればいい。

だけどお前は受け止めた。

更に、お前は闇で攻撃できる。

普通だつたら、透過する体なんて、攻撃できないからな。
だがお前は俺に攻撃を当てる。

それプラス、魔法も当たつた。

そして前提条件として、絶対に俺がする事。

それは、『全身強化魔法』。

……いや、語弊があるな。

普通、強化魔法なんて使わないと、魔法戦では一瞬で死ぬ。
だから、お前みたいな奴と戦う場合、絶対に強化をする。
しかも俺ぐらいいになると、体に染み込ませ、体の一部として扱う。

これらの前提条件と矛盾から導き出せる答え。

それは単純なものだつた。

……本人なら分かるよな？

『クツ…………』

「どうこういと？」

「…………つまり！ ディアボロス。お前の体は本物じゃない。
そして、だからこそ、闇だからこそ！」

お前、魔力にしか攻撃できないんだろ？」

第一十話 疑問追求（後書き）

矛盾してるのはお前の文だ！

と、もうひとりの僕が言います。

と、二つ電波がきた。

第一十一話 殺戮終焉（前書き）

やっと終わるバトルパート。

第一十一話 殺合終焉

「お前、魔力にしか攻撃できないんだろ?」

「え? どういって? アイ兄?」

「つまりだ、コイツはただの闇を魔力で集束させた者に入ってるだけ。

だから、物理攻撃には当たらない。闇は物質じゃないから質量もないし。

だが、魔力の塊ならば、魔法には触れられるはずだ。
自分で自分を触つてるよつたもんなんだよ。

だから、いくら物理攻撃に分類されると言つても、
俺の魔力でできた剣は受け止める。

だけど、岩石は物質で、魔力を纏つていなかから、避けない。
そういうことなんだよ。

だから俺は、アイツの偽の体から放たれた、魔力にしか当たらない
攻撃を避ける為に、ギリギリで、全身強化魔法で体の中にある外的魔力を
を外に押し出したんだよ」

『LJの戦でそこまで見破るとは。流石と言つたところか、跳躍者。
貴様との約束は守りつ。正体が分かってしまつてはこいつの負けは必至。

今回はこいつから退く。

貴様としてはそれで良いか?』

闇一色なのに、フツビティアボロスが笑った、ような気がした。
……氣のせいだろ。惡魔の王が笑うとか。

「待てよ。最後に聞きたい事がある」

『何だ跳躍者?』

「……『惡魔の王』、『跳躍者』、『天使の末裔』。
そして、『世界を纏めし四人の末裔』。
これは何だ? そしてお前とアリアの会話から微かに聞こえた『覚
醒』。

これじゃ、どつかの性質の悪い御伽噺だぞ?』

『御伽噺か……。ある意味ではそうかもしだんな。
いずれお前達二人は、眞実を目にする事になるだろ。う。
そして、もし眞実を知りたいなら、『救世主^{メシヤ}』。
これがヒントだ。
私から言えるのはそれだけだ。

いつかまた再戦^{じぶんじあ}を楽しみにしているぞ跳躍者!』

「はー? ちょっと待てよ!」

しかし俺の声は届く前に、
闇から魔力は消え、集束していた闇は霧散、消失していった。

「なんだつたんだ……」

「アイ兄……」

「アリア、お前、何か知ってるか？」
「アリア、お前、何か知ってるか？」
「アリア、お前、何か知ってるか？」

「ごめん。何も知らないんだ。

それに
アイツを知
てるのには
から。
家旅を終
したのか
アイツた

「何だ？」

一緒に探そう!

それで、
眞実を知りたいんだ！」

「ああー、言われなくともそのつもりだよ。じゃあ、今日は帰ろうか。養父を紹介するよ」

——ああ！

「よし！ 行こうか！」

『天使の末裔』の『覚醒』。

『天使の末裔』の『冥醜』
『跳躍者』と『悪魔の王』の戦い
そして『救世主』。

分からぬ事がありまくりだが、やるしかないか！

第一十一話 殺合終焉（後書き）

『悪魔の王』
デイアボロス
『ジャンパー』
跳躍者
『エンジェル』
天使の末裔
『メシア』
救世主

というのが読み方。

次回は家に帰ります。

実は、二次創作。色々な作品を、書きたい衝動のまま書くが、なかなかシックリこない。試し書きしてるのは、リリカルなのはA・s

ゼロの使い魔

ネギま

めだかボックス

学園默示録

と、色々よりどりみどり。だけど、なかなか難しい。

第一十一話 帰路、妹驚

今、もうティアボロスが居なくなつて、効力が無くなつた魔法無効化の呪いが掛かっていた扉を開け、そして既に神殿？からでている。

今は街に帰る事が優先だ。

「なあ

「なに兄？」

「情報とかその他諸々、この世界ではどういった所で手に入れるんだ？」

「この世界？ そういうえば『天使の末裔』は私？だとして、『跳躍者』ってやっぱ兄だよな？

アイツにもそう呼ばれてたし。何かあるの？」

「あー、その、なんだ。まあそれはまた今度……」

違う世界からのトリップなんて言つたら、「いつか帰るのか？」とか聞かれそうでや。

とにかく、もう少し段取りをしてからだな……。

「お兄ちゃん、お願い教えて？」

涙田の上田遣いでこひらを見てくる妹。

やめろ！ そういう田で見るな！

その涙嘘だろ！ そつなんだろ！ そつ言つてくれ！

「…………駄目？」

少し悲しそうにしながら言う妹。
もひやめひてほー！

「わ、分かッ…………」

分かった、と言ふやうになつたとき、妹の目が笑うのを見た。

「つひなーっ！ もひやの手には引っかかるねえ！」

「…………チッ。まあいや。でさ、もひやの質問だっけ？」

「あ、ああ。（切り替え早いな…………。つーか今『チッ』で！）」

「情報は、やつぱりフローの情報屋でしょ。もしくはギルドの高ランク保持者になる。

高ランク保持者のみに許される図書館があるらしいんだよね。
それと、もひや兄がやつてた、『遺跡』の調査によるもの。

…………とりあえず、一般的な情報は学校の禁書館でいいんじゃないの
？」

「…………」

「おーい。聞いてるかー？」

「ああ、お前つて結構知識あんなの。すげえな」

「何かバカにしたような褒めた様な発言……。

まあ、これぐらいならこの世界の常識だからな。

少なくともこの国にいれば普通に手に入る程度の情報だよ？」

「あ、そう。まあ、色々結構検討つけといったから、とりあえず今はマスターの所に帰んなきやな」

「マスターってどんな人なんだ？」

妹が興味津々といった感じで聞いてくる。

「マスターは、まあ話した?と思つけど、ギルドマスターをやってる。

それで、一人だつた俺を拾つて、養子として置いてくれる事になつた。

それは一週間ほど前ぐらいのことかな?

それで、魔力検査して、魔法を教えてもらつた。

因みにマスターは、何と内的魔力に光属性があつて、外的魔力でなぜか闇属性を使える。

すごいよな

「外的魔力で闇属性つて……。

そういうえばさ、兄は内的魔力は伝説の天属性魔属性なんだよな?」

「ああ。それは言ったよな」

「それとさ、外的魔力つて何が使えるんだ?」

「…………全属性」

「は？」

「だから、火、水、風、土、光、闇。全部使えるんだよ。外的魔力操作だけで」

「はああああああああ！？」

「だから、女の子は大きい声出しちゃ駄目だつて」

「そ、そそ、そんなこといつたら、マスターよりも兄の方が反則じやないか！」

さすがに正面から言われたら返す言葉が無いな…………。

「さ、行こうか妹」

「（この人スルーする気だ。誤魔化すつもりか！）あ！ 待てよ！」

そんな感じで歩いていく帰路。

第一十一話 帰路、妹驚（後書き）

妹驚は造語。

第一一二話 第一回鉄拳制裁タイム

妹も居るので、程々の外的魔力強化をして、四・五日程度で帰った。
100?を四・五日なんて滅茶苦茶な早さで帰れたのは、ひとえに
妹の強化魔法の熟練度のお陰だった。

俺が本気で、許容量全部を強化魔法に費やしたなら、妹の全力の軽
く数倍はいくのだが、
滅多に全力は使わないので、いつも使っている程度で走ると、
なんと妹もそれに軽く追随してくるのだ。

「お前、強化魔法得意なのか？」

「そりゃ、一番得意だ！」

内的魔力で一番高い適正の風属性だって、強化魔法の方がやり易い
し」

「へえ、そうなのか…………」

こんな感じである。

一番得意と言うだけあって、凄く速い。
なので、100?を四・五日で行けたのだ。

それで街についてみると、

「おお――！ これが首都かあ！

凄いでかいな！ 人も沢山いるぞ兄！」

こんなんで、凄い、何と言つか、

「和むなあ……」

口調はともかく、始めて見る街の賑わいだ。

凄い癒されるな。

……爺臭くなつてきたな、俺。（じつに来てから）

「なあなあ兄！ あれ何だ！？」

「これ買つてくれよ！ なあこれつて……」

街の男共の中にニヤニヤした目つきの奴がいる。

まあ、元々が良いアリアだ。

顔も十人中八人が振り返りそうで、（そーーー 中途半端とか言つた
！）

プロポーションも同じ年と比べたら結構いい方で、
だが、引き締まつてゐる体だ。

まあ、見てるだけならまだ良かつたんだが。

「なあなあ、俺達とちよつと来ない？」

「そうそう、可愛い姉ちゃん、ちよつと一緒に遊ぼうぜえ」

やはりテンプレの如く現れるやられ役。

妹はその気が強い男勝りな性格が災いして、

「あー？ テメヒらと遊んでる暇なんて無いんだよ。

とつとと失せん」

今までで一番ガン垂れていた。

うつうつ、妹が非行に走ってしまった！

お兄ちやん悲しこよ.....。

するとやられ役のテンプレモブA・Bが、顔を真っ赤にして怒鳴る。つーか例えが多い。

「んだといの女あ！ 下手にでてりやあいい氣になりやがつて！」

俺は黙つて妹と男達の間に立てる。

「あー？ てめえそこの女の知り合いかよ？」

「兄妹だ」

「姉妹？ はつはつは！ 笑わせやがつて！」

妹も生意氣だと思ってたら、姉まで馬鹿だつたとはー！」

……今こいつなんて言つた？
もつー回ワープレイしてみよう。

『姉まで』

間違えたら、男には鉄拳制裁。^{てつけんせーさい}女には、鉄言^{てつげん}
制裁。^{せつとく}

「お前ら一人」

「あ？」

「何だよ？」

後ろで妹があーあと二人の犠牲に追悼（偽）してる。

「いやがぜまあまあー。」

ボコツ、ドカツ、ゴスウ！

僅か一分後。

「俺は男だ。そして姉妹ではなく兄妹だ。
分かってくれたか？」

「は、はいいい！」

「すつ、すうみやせんでつたー。」

いやいや、一人とも物分りが良くて助かつた。

「さて、アリア。マスターの所に行くよ」

あ、ああ。分かつた。(怖いな)

まったく、この頃男と女の区別がつかない奴が多すぎ！ 服見る服！ この凶悪な服を女が着るわけねーだろーが！

まあ、この世界に来てから一一度田の鉄拳制裁だった。

第一二二話 第一回鉄拳制裁タイム（後書き）

しばらくはシリアルは無い、と思します。

皆さん。

どうかからの引用でもいいので、
アリアの武器・戦闘時服装のアイデアを私に提案を一
どうか感想に書いてください！お願いします！

鉄拳制裁と大覇星祭つて、なんか語呂が似てる（笑）

第一十四話 付『魔法研究』

「遅かったな。何処まで行つて、何処で女連れ帰つてきたんだ？」

「違う！ 女じゃなくて妹！」

「どうもー。妹のアリアです」

「あ、そうなのか。つて！ 養子一人目にしろつてことかー…？」

分かると思うが、今はマスターの書斎にいる。つい先ほど帰つたのだ。

「はい。アリアにも色々と事情があつて……。アリア、話しても良いか？」

「いいよ。これから世話になる父代わりの人だからな。後、マスター」

「何だ？」

「少し地下の訓練場を借りて良いでしょうか？」

「ああ。良いぞ」

「ありがとうございます。アリア、マスターに話をしたら地下に来てくれよ

「ああ！ 分かった！」

マスターに地下の扉を開けてもらい、一人で地下の訓練場に来た。もう俺が落とされた穴は無かつた。

「さて……」

ここでやる事はいくつもある。

それは、悪魔の王デイアボロスと戦つたときに出来た魔法と、武器の確認。

あの時、俺は今腰に付けている太刀は使わなかつた。
アイツが相手の場合、その判断が命を救つたわけだが。
しかし、今のうちに刀の使い道を考え、今俺が使える有効な攻撃を確認しなければならない。

左腰のベルトにささつている鞘から出でている柄を握り、一気に刀を抜き出す。

しかし、相変わらずでかい。

「…………」

無詠唱による、外的魔力付与。

まだ目に見える程ではないが、宙を漂う外的魔力が刀に纏われていくのを感じる。

そしてその外的魔力に属性をつける。

「……『風』」

やはりこれだらう。

まだ思いつきの段階でしかない魔法なので、失敗しては困る。

『火』を纏わせると、もし理論が間違っていたら、刀が燃えて煤だらけになつて、使い物にならなくなるし、『水』を纏わせて、あつという間に銷びるかも。という考えなので、やめておいた。

『土』に至つては、付『』して刀が岩の塊になつたらショックだから、だ。

しかし、『風』なら、刀に對して物理的な影響はほとんど無いし、前にも言つたとおり、超能力時代で使いまくつたので、やり易い。それに、悪魔の王ディアボロスと戦つたときも、『風』には凄く助けられた。

超能力も、隙をみては偶に練習し、制御と応用を繰り返している。床、壁を操つたり、空気を操つたりしている。

右腕のメンテも完璧だ。

どうやら、死んだ時に（死んでない！）懐にマニュアルをいれていだからか、この世界に一緒に来た。

しかし何故かこちらの人たちはこれを読めない。

まあ、考えるのはここまでにしておつ。

目の前を見る。

「は？」

この頃この言葉が多い。
驚く事ありすぎだな。

刀の周囲10cm程まで風が纏つている。

何故分かるかというと、見えるのだ。

風が超高速で吹き荒れ、その部分だけ、暑くも無いのに陽炎のよう

な搖らぎが見えるからだ。

「すげえな。……『解除』」

と、その瞬間。

ドパアツ！

と、何かが発せられた音がして、
するといつの間にか刀から風が消えていて、

ドガガガゴゴ！

と、石が削られる音がして、

目の前の壁に、掘削機で掘つたかのような、
直径30cmの小さい、それでいて深い穴が開いていたのだ。

「『解除』についてもっと原理を追及したほうが、良いのかな？」

今の解除は思いつきり失敗だつた。

刀に影響は無いが、壁が大変な事になつた。

『解除』とは、その名の通り、付与魔法を解除するものであるが、
多分さつきのアレは、解除したのは『付』『』という命令だけで、
風属性の外的魔力が吹つ飛んだのだろう。

「まあ、これはこれで、兵器認定？」

こここの壁は特別分厚く、頑丈に、頑強に作つてある。

超能力の前では意味が無かつたが、中級魔法の特訓の時に何度も当

てても大丈夫だつたからだ。

それに、…………推定10m程の深い穴を開けたのだ。

……『それ』を兵器と呼ばばずしてなんと呼ぶ？

「まあ、『風』終わり。次、『水』いくか

しかし、さつきので、制御はできていたといつ自身があつた。なので、次に物理的影響がない『水』の付与を行う事にした。

これからももう少し、これからのことを考えても、これから行くかもしれない『遺跡』や、戦うかもしれない魔物。^{ティアボロス}そして『悪魔の王』の事を考えても、やはり新しい力は必要だらう。

しばらくはその研究をすることにした。

第一十五話 幕間（前書き）

前回？とかしきながら、いきなり幕間。

「…………暇だな」

声が響く。

其処は、黒かった。

全ての景色を黒く塗りつぶして、尚且つ全ての形が分かるような世界。

その中に、人がいた。

いや、人、というのも変だらう。

こんな何も無い所に居る時点で、おかしい。

そして、その人、いや、少年は、その黒い世界には不釣合いな形容だった。

一言で言えば、美少年。

黒い世界に目立つ、真っ白な色。全ての色素が抜け出したような色。肌の色もそうだった。

服は、まるでどこの皇帝陛下のように、派手で、そして単純なもの。

しかし、見る人が見れば分かるだらう。

この少年は、普通ではない。

「この前の様に面白い事はやはり早々には起らぬか」

少年は、その容姿と相まって、賢人のような喋り方をする。

「……やはり我直々に向こう側に行かぬとなぬか」

「なりません！」

いきなり大きく世界に響く声。

それは、まるでいきなり、だが元からいたような雰囲気を醸し出す。と、少年の前に人影が居た。

瞬きをする瞬間を突くような、何時の間にと、いふ感覚。そしてその人影は喋り続ける。

「ついで、今まで向こう側へ、精神で行かれてたじやないですか！ 今になつて本体でいこうなど！ 許しませんよ！」

どうやら人影は女であった。

紫の、地面にまで着きそつた長髪。

切れ長の瞳の、どこか妖艶さを醸し出す容姿。

黒い服。

露出度を気にしてませんと言わんばかりの鎧。

だが、その見た目とは裏腹に、話し方からして真面目な性格のようだ。

「我は我の好きなようにする。

それに、また会つて、戦をするのだよ。

今度は『天使の末裔』^{エンジェル}も含めた多対一だ！

「だからー、駄目ですってば！ いい加減怒りますよー！？」

「……年下のお前に言われても、なあ？」

「だーかーらー！」
.....
「

一変、まるで何処かの我侭王と従者の様な、可笑しい一面が其処にはあつた。

SIDE CHANGE

深い山の奥。

樹海と言つても差し支えない、到底人が住むべき所ではない場所。

「これで最後」

白いフードを目深に被つた、顔も性別すら分からぬ者が、血の海の中で立つてゐる。

目の前には、その者が言つたであろう最後がある。

それは、魔物だった。

しかし、それは明らかに普通の魔物では無かつた。

それは、ビックシリと、深い毛で覆われた体。

背中から生えた黒い翼と、横にある四本の腕。しかし、それでも顔は、人そのものであつた。

その、人にも見えて人でないものが、五体バラバラになつていて、それが誰のパートかなど、それをやつたフードの人本人でも分から

ない程であった。

「……終わり。次は…………！」

フードの人気が驚く素振りを見せる。
そして、小さく咳く。

「……久しぶりに会うのか。

どんな奴なのか。『覚醒』はしてるのか？

……まあいい。今は己の使命を進めるのみ

そして、一度もそのフードを取らずに、その人間は、樹海の奥へ消
えていった。

第一十五話 幕間（後書き）

フードの人間の正体は？

次回、付与魔法研究？

第一十六話 付『魔法研究?』(前書き)

「あら」「です。

あなたもーまだ続あがせよ。おしゃり。

第一十六話 付『魔法研究?

「……『水』」

その瞬間、ドバアッと轟音が部屋内に響き渡り、何もない場所から水が生まれ、それが段々と流れを持っていき、刀の刀身部分のみに集まる。

刀身部分は、今度は本体から5mm程度しか付『されてなく、水はほぼ透明。

しかし、流れだけは、そこらの洪水やダム放水の軽く10倍は越すであろう、

肉眼で見えない速度で刀身の表面を奔っている。

「……試し斬りするか」

さつきの、風属性付『で、自分で触れなければ、特に問題無いといつ感じだったので、今度は試し斬りしてみることにした。

壁に近づき、左手で壁に触れる。

「能力発動。『変形』。対象、壁」

その瞬間、触れている場所を中心に、壁が円状に凹み、そしてその分の石が、部屋の中心に出た。

「成功だな」

更に壁に近づき、水属性付「」を施した刀を構える。

「ハツ！」

そして、横薙ぎに振る。
と、

スカツ

「あれ？」

少し体勢を崩してしまったが、もう一度立つ。

今のはおかしかった。

絶対必中距離なのに、セフイ　ス級太刀の横薙ぎで外した？
絶対にさつきの感触は、空振りした感触。

「嘘だろ？」

やつぱりこれを言つてしまつた。

勿論、それに匹敵する事が田の前にあるのだが。

今、俺の田の前には、俺が見下ろす形で、壁が立つてゐる。
見下ろす形で、だ。

そしてその奥、向いづ側には、手前が斜めに削りあててある壁の上。

つまり、俺のあの太刀は、

「マジかよ」

水属性付与をしたことにより、科学の力である、『高水圧カッター』みたいな感じになっていたのだ。

なので、感触が殆ど無く、そして、切れ味が爆発的に増したから、逆に体勢を維持できなくなつたのだろう。つまり、勢いが強すぎたのだ。

「高水圧過ぎだろ」

はつかり言つと、田の前にある壁は、高さ3m、厚さが30cmもある。

よべぞー！今までを魔法で再現できたものだ。

俺は、また一つ、魔法に対して関心を持つたようだよ。すると、

「兄ーーーー！」

「おー アリアか！」

後ろにある扉から声が聞こえたので、振り返ると、妹がいた。

「もう話し終えたのか？」

「ああ。それで、私も面倒見てくれるってさ。良い人だね、義父さんも」

「ああ。マスターはああいう人だし、そこが良いんだけどな。
それで、どうする？」

俺は妹に問いかけながら、水属性付与の刀を一振りし、
外的魔力を霧散させる。

今度は、解除魔法に工夫を加えてみたので、
さつきのような事も起こらず、外的魔力は無くなつた。
そして刀を鞘にします。

「どうするって？」

「これから、だよ」

俺はフツと笑つて、妹に言ひ。

「決まつてゐだろ」

妹は、いつもと変わらない口調で、
俺の笑みに満面の笑顔で返しながら、

「私と模擬戦しよーザー！」

「…………（半戦闘狂め）…………」
バトルマニア

結局、妹がどうしてもと頼むので、
一回、妹の実力を見るために、模擬戦する事になつた。
……いつも思うけど、急じやね？

第一十六話 付『魔法研究?』(後書き)

次回、妹と兄の戦いです。
そして分かる妹の実力!

第一一十七話 付『魔法研究? with妹

今、妹と、距離をとりながら並走している。

勿論模擬戦だよ？

妹の武器は、短剣と投げナイフと、内的魔力による風属性魔法。妹によれば、これ以外にもいくつか内的で使える、と聞いたが、マスター。それは滅多にでないんじゃなかつたのか！

「おーおーおーおー！」

「属性付『』…『』…『』…

次の実験。あの、形が変にならないか心配されていた
土属性付『』を、妹との模擬戦中にやつた。

妹は現在進行形で驚いている。

かくいう俺もだが。

また変なのができた。

刀全体が、石や砂、岩や瓦礫などかき集め、押し固めている。
綺麗な形の太刀のはずなのに、

モンンにでてくる『ブリュンヒル』をもつと無骨にした感じになつてしまつた。

「重いな。一撃重視型？」

ならばそれはあまり意味が無い。

風属性付『』だって、水属性付『』だって、軽い今まで

どつちにしたつて威力は凄い高い。まさに相手を即死させる為のものみたいだつた。

だから、重くなるという代価を払つてまで、威力を高くする必要はない。

「おいおい兄！ そんなノロい攻撃なんて当たらないよ！」

そうなのだ。コイツは、とにかく速いし、素早いし、フットワークがある。

純粹な速さだけなら俺が勝てるが、それ以外が妹は凄いので、模擬戦なら、俺並みに速く動けなければ追いつけない。

俺は、重さと、空気抵抗によつてなるノロさを我慢しながら、ブン、ブンと、その大剣で宙で空振りしていた。

「ハア……水や風と違つて、そつ簡単に結果は出ないか……」

俺はこのままでは、動きが制限され、妹に半ボッコにされてしまつ可能性があつたので、

早々に土属性付「」を止め、火属性付「」をする事にした。

「『解除』…………アレ?」

解除魔法が効かない？

おかしいな。水のときに直したはずなんだけど……。

「『解除』！」

気合を入れたけど無理でした。

「何一人でやつてんだよ！」

風の精霊、我に答えよ！『ストーム・ダンス』！

その瞬間、視界から消える妹。

今のは確か風の補助魔法。

俺がいつも超能力でやつてている事の劣化版を、魔法でやるものだ。因みに初級だな。

「ヤバッ！ ぐふう！？」

鳩尾に思いつきり蹴りを入れられた。

「痛あ！ ！」、の、やろおーーー。」

野郎じゃないけど。

土属性付『されたままの一撃を、自分の正面真下に撃つ。するとその時、

「はー？ なんだこれ？」

体が赤褐色の光に覆われ、そして、

ド「オオオオオオオオオオオオオオ！」

と、まあ、擬音で表すなら『れぐらい』の、鼓膜が破れそうな音が響いたと思ったら、

「「あ、あれ？」」

妹と声が重なつた。

それもそのはず。

目の前には、焦土と化し、俺の正面100m程抉り取られた地面。
そう。地面だ。

部屋の中で響いていたのは、地面に

するべ

「この馬鹿野郎どもがあ！」

「？」

「ま、マスター？」此處は何處ですか？

卷之三

ここにいるのは私が転移させた上

「なんでそんな事を？」兄と楽しくてたのに

「ハア、だからな、お前の兄が、その持つてる剣で、部屋を倒壊させるような

攻撃を放つたから、直前で転移させたんだよ」

「
「
転移?
」
」

「まあ、そんな」とせづりでもいい。

お前ら！ 私の家を壊そうとした報い。うけてもらうつるー！」

そして手をワキワキと動かして、皿を光らせながら近づくマスター。

「『あや、ギャアアアアアアア…』」

この叫び声、街まで聞こえてたそりや。

第一一十七話 付『魔法研究? Wit h妹 (後書き)

転移は、現存しない魔法です。

その内部事情はちやんと話しますので。

第一十八話 横暴だ！（前書き）

一章よりも凄い長くなるような気がしてきた今日この頃。

第一一十八話 横暴だ！

「で、さつきのは何だ？」

「「「」」つちが聞きたい！」「

今は、街に入つて、またマスターの家の地下の部屋に来ている。今度はマスターも一緒に。

「私は、書類仕事も終わつたし、地下を見てみようと思つただけだ。そしたら、そこの馬鹿息子が家をぶつ壊すよつた魔法を撃とうとしてる」

「え？ ちょっと待つてくださいよマスター。

俺は別に家を壊すほどなど……」

「いやいや、あの時のアイ兄の魔力からしたら、家+ が吹つ飛んでたと思つよ私は」

それを聞いて呆れるマスター。

「まったく。魔力量操作は基礎中の基礎として教えたはずだが？ 何をやつてるんだ」

「いや、それは、新しいオリジナル魔法を考えて……」

「！？ お前がオリジナルか……。もつそこまで。

まあ、今回は私が居たからいいが、今度からは氣をつけろー」

「はいー。」

「あの、アイ兄も思つてると思つんだけど、転移魔法つて何?」

そうだ。

転移魔法なんて教えてもらわなかつた。
この世界は、魔法はあるが、転移・転送系は無いのだ。
従つて、俺と妹と自分を同時に転移できるはずがない。

「ああ。それはこの部屋の元々の持ち主の仕様だよ」

「「元々の持ち主?」」

「そうだ。

私の先祖が作ったのがこの部屋で、
家は改修を続けていて、部屋だけは残つていて。
そしてこの部屋を作つた先祖が、ここに変なトラップを仕掛けたん
だよ。
どうやらか原理を知らないが、街の外に転移できるトラップをな。
今はそれを緊急離脱用として使つてはいるのに過ぎない」

「やうだつたんですか……。

あ、そういうえば俺の刀!」

思い出して自分の刀を見る。

……良かつた。ビリヤー!属性付「魔法は完成らしい。」

「それでさ、兄。今めっちゃ暇なんだけどさ、
何か模擬戦以外にやること無いのか?」

確かに。模擬戦でもやつたらまた飛ばされる可能性大だし。やはり、訓練にもなる暇つぶしが良い。そして、『遺跡』が見つかったら行く、という形が望ましい。

「ああ。それならほら、これ持つとけ」

「？」

俺と妹に投げ渡される一枚のカード。カードには、Bと刻まれている。

「！」、これって！？」

妹が随分驚いてる。

「これなんだ？」

「それはギルドカードだよ。

アイはもうEランクのカードを持つてると思つが、これからはBランクだ。おめでとう！」

「はあ！？ え、そんないきなり！？ 何でBランクなんですか？」

「せうだよ養父さん！ 何でアイ兄がBで私がEなんだ！？」

あ、やっぱり妹はEからなんだ。

「ああ、それについてなんだが。

アリア。聞いて驚くな。アイはあのフェンリルを倒したんだ

「はああー？ な、何だよそれ！ 反則だろ！」

「だから女の子が大きい声を「そんなのどうでも良いー」……」

「せつせつと説明しりおりー」

「ハア……（横暴だ）分かつたよ……」

妹は横暴でした（今更）

第一二十八話 横暴だ！（後書き）

どうか感想を……求ム

第一十九話 初！依頼（前書き）

はじめてのおつかい（依頼！）

第一十九話 初！依頼

「で、結局ここに至る」

「…………」

あれ？

妹が呆然として無反応です。

実は超能力の事教えました。

マスターからも、教えておいたほうが良いつて言われたし、
いつか話そうと思つてたから。

だけど、世界転移？の事については話しません。

「お～い、アリア～？」

「な、何で黙つてたんだよお――――！」

バキッと一発

「グバはアあツ！？」

「そういう事は最初に言つてくれよ――――！」

「私達家族だろ！？」

「……すまないな。心配かけたくないでわ」

すると少し頬を染めてバツが悪そうに顔を背ける妹。

「うひ、だ、誰が心配なんかするか！」

そ、それより養父さん！ 暫瀆しつて何だつたんだよ」

「ああ。そりや、ギルドカード渡した時点で分かってるだろ？」

「やつぱりやうか……。

「依頼、ですか？」

「そうだ。次の遺跡に行くアテが出来るまで、依頼でもやつておけ。魔法の訓練と金をためるためにでもな」

その瞬間、妹が俺の手を掴んできて、

「よし！ そと決まれば直ぐ行いひー

兄！ 最初は私のランク上げに付き合つてー！」

「あ、ああ。別に良いが……」

まあ、依頼をすれば妹の実践訓練にでもなるし、金も貯まるしな。

「おひ、やうだ。これ持つと」

扉から急いで出ようとすると、マスターが何か一つ投げてきた。それをキャッチする。

「これば？」

それは、一つのバッヂだった。

あの、襟元につけるタイプのそれには、剣と剣が交差している模様

が刻んであった。

「それはこのギルドマスター直々に依頼を伝えるほどの強者。しかも人格も判断して渡されるもので、それがあれば色々と便利なんだよ。

それ、常時付けとけ。絶対に盗られるな。

はい、いってらっしゃい」

「分かりました。いってきます！」

妹と共に家を出て、ギルドの建物に向かつた。

そして此處はギルド。
扉を開けて中に入る。

やはりそこは、男ぐらいいしかいないムサイい場所…………ではなく、女子供もいる、普通の建物だった。

「「「」がギルドかあー！」

「ん？ アリアは初めて来たのか？」

「ああ！ ナイフとか短剣、魔法の訓練は独学だったから。
だから依頼受けるのも初めてなんだ！ 楽しみだよー！」

「そうか……」

妹が眩しいなあ。

そして受付嬢の窓口へ行く。

「ここにちは。久しぶりですね」

「あー、この前の無茶苦茶な人ですね！」

依頼ですか？」

「（無茶苦茶つて……）はい。

BランクとEランクが一緒にできる依頼ですけど、何があります？」

「……そうですね。規則ですと、
その組み合わせならば、一応Bランクは大丈夫ですけど。
高ランク保持者は、低ランク保持者が居ても、
そのランクの依頼を受ける事ができるので」

「そうですか。ならBランクの依頼を一通り見せてもらえないでし
ょうか？」

「はい

そうして渡された帳簿を開くと、様々なBランクの依頼があつた。
それを妹も横から覗き込む。

妹が呟く。

「えーと……『ダークサーヴァント』十体討伐』、『未完成暴走ゴ
ーレム三体討伐』
『ラピスレイズドラゴン古龍種一體討伐』、『キマイラ中型一體討

伐『

つて、これ討伐依頼多いな

「そうですね。Bランクから、討伐依頼が主となり、レベルも桁違
いです。

ですが、あくまでもBランクなので

「う～ん……アリア、何かやりたいのあるの?..?」

「そうだな……あー、これなんてどうだ?」

妹が帳簿をめくって、俺に見せてきた依頼。

それは……

「『男爵級悪魔撃退』!..?」

何かその依頼名に、

これ本当にBランク!..?と心中で叫んだのはいつまでも無い。

第一十九話 初！依頼（後書き）

悪魔です。きっと何かがあります。

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退（前書き）

わざと長く書きたいよ〜！

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退

皆さんこんばんは。アイ・M・ウイルドレースです。
喋り方が違うのは気にしないで下さい。

前回、何とBランクの依頼の中で、悪魔の撃退をする事になりました。

しかし、この悪魔撃退。

『撃退』と言つてゐる様に、討伐成功は数少ないそうで、しかも
撃退には、
そのランクの保持者が最低五人はいて、連携を取らなければいけない
いそうです。

まったく妹は何を選んでいるのや。ひ。

一つ、ここで悪魔の階級についてお話しします。

悪魔には、階級、とは言つても正確には爵位と言います。

爵位には、いくつか段階があつて、

下位から、『王』、『親王』、『大公』、『公爵』、
『侯爵』、『伯爵』、『子爵』、『男爵』と、いくつもあります。

今回の悪魔は、男爵級らしいので、一番弱いです。

まあ、人間からしたら、それでも死にたくなる強さらしいですけど。

そして今は、その男爵級悪魔の撃退に行く愚かな一人組として、馬

車で送つてくれています。

悪魔撃退依頼や、その他の難易度の高い依頼には、専用馬車が送つてくれるそうです。

……「」の喋り方もいつもと違ひめんどくさいので、元に戻します。

「なあアイ兄、いつになつたら着くんだ?」

「……お前はいつもそれだな」

「だつてよ! こういう時つて暇じやん!
景色だつて眺めるもんなんて無いし!」

まあ、確かに、馬車の窓から見える景色は、殺風景。
荒野の真ん中を走つている。

するといきなり、

キキイ!

と音がして、馬車が止まる。

そしてギルド派遣の御者さんから声が聞こえる。

どうやら、悪魔を撃退してほしいと連絡のあつた村についたようだ。

俺達一人は馬車を降り、村の入り口らしき場所に入る。
随分人影の少ない村だ。

「さて、」の村長さんにでも事情聞くか?」

まあそれは定番だし?

だが妹は首を横に振つて言つて。

「いやいや、その必要は無いみたい……だよ?」

「ん? 何で分かるんだよアリア」

「だつて、ねえ?」

「どこか驚いてこらぬうつな、緊張しているよつな感じの動きをする妹。

「だから、理由を言えつて」

「その、ね? あれ見てよ

妹が冷や汗かきながら俺の後ろを指差す。

あれ? 前にもこいつう事無かつたつけ?

後ろを向いて、妹が指差した場所を見る。

それは、村の入り口にある看板に貼つてある紙だった。

「えーと、何なに? 『悪魔崇拜の予定日・毎日の朝八時……んじやこつやああ! 普通こんなの平然と貼るかー? 貼めてんのかー?』

「いや、私が思つこや、『んなの貼つるのが普通、つてことじやないの?』

「それつて……やづあくね?」

マジでヤバいな。

「そりゃそりゃだろ！この村全体が悪魔に侵略されて、しかも洗脳
か信仰かしらないけど
凄いことになってるよな！
私達がここに入つたつて事は……

悪魔+こここの村民も、『敵だつてことだよ、ね？』

「…………」

第三十話 依頼、男爵級悪魔撃退（後書き）

アイ達は対人の覚悟を決められるのか！？
次回、お楽しみに。

この頃学校が忙しくて、更新が遅くなりそう。
まあ、今日遅くなつたのは、無回転寿司にいつたからですけど……。

第三十一話 発射！『ジエノサイ ブレイバー』（前書き）

何かシリアスじゃ無くなつたのに
気付いたのは、書き終わった後。

第二十一話 発射！『ジエノサイ ブレイバー』

「……アリア、今度こそ、人を殺す覚悟をしておけよ」

「あ、ああ……」

俺は前の世界で、ホムンクルスという化け物と戦つたが、奴らは人間にそつくりだった。その中身を除いて。

だから、さつとやれるはずだ。

そつ自分に言い聞かせ、村に入る。

と、その瞬間、

「「……!」」

周りの家々から、禍々しい殺気が溢れ出た。

「これはもう駄目だ。妹、絶対に殺せ。
殺さなければ村民が救われない」

「分かつてるよ……」

これは知識として入れたのだが、
悪魔。それは人の『弱み』、『怒り』、『憎しみ』、『恨み』、『
悔い』。

それら全てのどれかを掌握し、自分の崇拜者として崇めさせる。
人は最初は抵抗するだろうが、

悪魔を崇拜する事で起こる一時的な安心感に囚われ、そして、抜け

出せぬまま悪魔の言いなりになる。

この安心感は、悪魔崇拜における信者から魂の欠片を抜き出す際に
るものらしい。

なので、一回悪魔に掌握された魂は永遠に現世に留まり、成仏でき
ない。

だからこそ、そのような者達は、殺してあげるしかない。

と、考え事をしていた次の瞬間、村民が家々から出てきて、俺達の
周りに集まりだした。

その村民の顔は、真っ青で、目は虚ろ。

だが、確かにそこにはボロボロの、悲しい魂があるように見えた。

そして、完全に包囲すると、俺達の前の列が左右に分かれ、

その、元凶たる男爵級悪魔が姿を現した。

「お前らか、この俺様の土地に無断で入ってきた奴ってのは！」

その姿は、あの典型的な、神話に出てきそうな悪魔だった。
黒い体毛に覆われ、そして山羊のような顔と角を持つアレだった。

だが、しかし、相手の力量も知らんて男爵が威張るか？

おっと、少し冷静になつたほうがいい。

今のところ全村民か分からぬが、大量の人間が俺達の回りを囲んで
いる。

一つの視界に、少なくとも50人は映つてゐる。

この村の規模からして、もっと居そうな気もするが。

「お前が男爵級悪魔?」

「いかにも! 我がこの地を統治する悪魔だ!」

「……それってただの左遷?」

と思つた。

「…………」
この村は昔からこの地に住まう神を崇めていてな、

「え、ちよつ! 何いきなり言つてるの兄!..」

「助けるんだよ。残りが居れば、だけど」

「ハツハツハツハ! 舐めるなよ!」

「この村民達を殺す勇氣などない癖に!..」

「…………答える」

「やうだな。半分、といったところか。

だから信仰心が強いのだよ。

まあ、生き残りどもは全員、捕らえてあるが。

男は貴重な労働源、女は貴重な慰安源だからな! 人間の女はうまいのだよ」

それを聞いて悪魔を睨む妹。

「最低！ 兄、どうする？」「

「……俺が攻撃する。

隙についてお前は包囲網を突破、村民を捜し、救助しつつ

「わかったよアイ兄！

風の精霊、我に答えよ。『ストーム・ダンス』」

ボソッと弦くようにして魔法を唱え、身体強化する妹。よし。

「悪魔！

それじゃあ勝負といこうか！」

刀を構える。

「付』、『士』。行くぞ！』

土や岩石、瓦礫が刀に押し固められる。

ブリュンヒルデっぽい大剣を構え、そして、アレを使うつ！

魔力が剣に集束し、大剣が赤褐色の色の光を纏い、段々それが俺に伝わってくる。

「いけ！ 『ジエノサイド レイバー』…………

その瞬間、視界が赤褐色の光に包まれた。

第三十一話 発射！『ジエノサイ ブレイバー』（後書き）

最後の完璧にネタ化したこの話。

第二十一話 ジニア ジニア、見ると作者の手抜き加減が分かる（前書き）

何かいきなりシリアルス兼コメディの中の、
どっちでもないつなぎ話がでした。
手抜きですみません。

第三十一話 ジャンヌ、見ると作者の手抜き加減が分かる

「あ～あ……」

見渡す限り、敵はない。

まあ、さつきの、初めて実践で使ってみた『土属性付』『魔法』によつてできる、波動? のようなものを発射したが、

いかんせんパワーが「俺丁寧EEEEEE」状態になつてるので、なんとも制御が難しい。

とりあえず、今は超能力をほんの少しだけ併用して使いこなしてい る。

だが、威力だけはどうにもならないので、一部の敵を吹っ飛ばすつもりが、周囲にいた元村民が全員塵になつた。

それに男爵芋もいない。

妹はとつぐに行つたよ?

「こんなもので死ぬか」

「……なんだ、まだ生きてたんだ」

目の前にいきなり現れた男爵君。 服は元々着ていなかつたが、なんか体がボロボロだ。

「やつは言つてもセ、もつ満身創痍つて感じだぜ？」

「悪魔を甘く見るなよ人間？」

さては悪魔と戦うのは初めてか！ そつかそつか！」

「やうだけどさ、何かムカつくなお前、何が言いたい？」

「ふん、『土属性』如きで悪魔を倒そうなど、温いわ！
男爵を舐めるな！ 『ヘルキメラ』！」

詠唱も何もない魔法で、いきなり地中から出でてくる、
まあ俗に言つキメラ。キマイラでもいい。

「悪魔の使い魔に勝てるか？」

「……付与、『水』」

刀に薄く水の膜が張つていく。

「だれが負けるかよ、雑魚が。話数稼ぎに出てんじやねーよ。やつ
さと消えろ！」

シューイイイイン！

と音がして、そして次の瞬間、キメラの体から真っ黒な血が噴出し、
消滅した。

「な！ なんだ今のは！」

「……答える気はない。今話で終わらせてやるー。
やつをと消えろー！」

現世に存在する根源に宿りし全ての光よ。我、世界の跳躍者に従い、敵を正し滅せよ！

光の幻想、『ファンタズム・ホーリー』！

「え？ それって！ しかも『跳躍者』って… 嘘だろ…？」
つてギャアアアアアアアアア…！」

ここにまた悪魔についての話をしよう。

悪魔、というものは、普通の属性魔法は効かない。
いや、効くには効くが、すぐに再生するのだ。
それがたとえ『光』属性であろうと。

だからこそ、『魔』にたいする唯一の属性。そう、『天』属性である。

闇には光だが、魔には天だ。

だから、こんな次の話のつなぎ程度にしかならない所に、
あの『悪魔の王』^{ディアボロス}と戦をした時に発現した魔法を使ったのだ。

「……やりすぎたか」

俺の目の前には、荒地が広がっている。

俺を中心にクレーターが出来ていて、多分半径50mはあるだろう。

妹とその他の皆さん。どうか範囲内に居ない事を祈ります。

「……おい作者、いつまでこの話を続けるんだ？」

次回、久々にアイツが！

第二十一話 ジニア ジニア、見ると作者の手抜き加減が分かる（後書き）

次回からは思いつきシリアルになります。
多分。

第三十一話 『呻吟』（繪書也）

呻び歸る、ソレ。

アイがあつさりと男爵級悪魔を倒した時から少し遡る。

「アリア SIDE」

「さてと、ここまでなら何も来ないだろ」

まったく、アイ兄がやつた、私との模擬戦で使つたやつをあつさりと使つた。

あれって周りの事考えない武器なんだからちゃんと自重しろよー。

「だけど……こりゃ正確な場所も聞きだすべきだつたか？」

この村。最初の村民は全村民の半分と言つていた。

視界に入る分は50人だったが、多分あの時は軽く数百人いた。

だけど、そんな大人數を監禁しておける場所つてどこにあんだけよー！

「…………ん？ あれつて……」

丁度、多分村の真ん中ぐらいの所で、宙から辺りを見渡すと、一つ、やけに大きい家があつた。

多分村長とかそんな感じの家だろ。

まあ、怪しいとしたらあそじだろといつ考へで、その家に向かつて走つた。

「……これ益々怪しいな」

大きい家の入り口の前に来ると、はつきり見えた。

扉の内側から外側に、紅く、何かが引き摺られた跡があつた。

「これ血か……」

扉を開けると、ムワツと血の臭いが広がつた。

気持ち悪い。この匂いを嗅ぐだけで、あの時の光景が、あの、時の

……

「う、…………うううううええ…………」

一瞬何かがせりあがる様な感覚が喉の中を駆け巡り、次の瞬間、出してしまつた。

「うう…………」

こりや、また兄に『女の子がはしたないぞ!』って言われそうだな。いや、こういう場合は『大丈夫か?』か?

そんなふざけた事を考えながら、部屋の中へ入つた。

床には、まだ血の跡が残つている。

それを辿つていくと、書斎のよつな、一際他の部屋よりも広い部屋に入った。

その血の跡は、田の前の……何だ?

「隠し階段？」

血の跡は、開きつ放しの隠し階段？に続いていた。

とりあえず、中に入つてみる。

敵は悪魔だけだから大丈夫と思った。それに、『^{ディアボロス}悪魔の王』と互角に戦つた兄が負けるとも思えない。

下に続く階段を降りる。

と、階段が途切れたそこには、

「何だよ、これ……」

牢屋があつた。

牢屋の中には、表情を見なくとも憔悴しきつた感じの人間が、手錠と足枷で身動きを封じられていた。

見るからにどうやら男性と女性に分かれていて、子供もいる。多分子供はまだ純粋すぎて、低級悪魔では掌握できない魂だったのだろう。

一番近くにある牢屋を風の魔法で斬り捨て、中に入る。

「おいお前ら、大丈夫か！？」

牢屋の中は、とても暑く、××の臭いがムンと鼻を突く。そこは、私と同じくらいの歳の女子が集められた牢屋だった。

「う……あ……」

虚空を見つめるその瞳は、一瞬一ちらを向くものの、それに私は映つてなく、また頃垂れる。

壁に向かって何かを見つめながら延々と咳く者も居る。

よくこれまで信仰心だけでも守りきれたものだ。 彼女らの抵抗が、そ
こで顕著にあつた。

「ちくしょお！ 次だ！ 誰かいないのか！？」

牢屋から一回出で、思いつきり牢屋が密集する部屋の中で叫ぶ。
しかし、

.....

何も返つて来ない。

微かに聞こえるのは、力の全く入っていないうめき声だけ。

ここには、確かに悪魔には染まらなかつた強靭な魂の持ち主が、それは多くいるのだろう。

だが、それだけ。

いくら強靭な魂を持つていようと、時間が経てば崩壊する。それも、低級悪魔程度も掌握できない程に、狂う。

ମାତ୍ରାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

周りから迷惑だといふ顔も向けられるわけも無く、
ただただうめき声が聞こえるのみだった。

「お呼びかな、『天使の末裔』？」

「…誰だつ！」

いきなり後ろから声が響く。

それも、気配も何も感じさせずいきなり。

そして後ろを振り向きながら、聞こえる声。

この声は、

「誰だと？ 笑える事をいつ？」

まさか、もしかして、

「もう貴様だつて知つておるひつ！」

この口調。

やはり、それは、黒かつた。

「お前は…」

だがしかし、それは以前のものとは違い、
『色』を持つて、『姿』を持っていた。

「やつと分かつたか。そつ、我！」

第三十四話 Hの目的

SIDE アイ

「あれ？」

悪魔を跡形も無く消し去った後、妹の魔力を感じながら、妹が向かつたと思われる方向へ歩いていた。

だが、いきなり、ここにいても分かるぐらいな、膨大な桁外れの魔力が村を襲つた。

「ツ！ 何だよこれ！」

その膨大過ぎて、目立ちすぎている、重圧となつて襲い掛かる魔力を追うこととした。嫌な予感がする。

「何か知らないが間に合ってくれよ！」

両脚に外的魔力付与をして、能力で風の噴射を行い、今できる最大の加速をかけ、走る。

SIDE アリア

「『悪魔の王』^{ディアボロス}！ 何でお前が此処に！」

「ふむ……それよりもまずはする事があるだろつ『天使の末裔』？
生身の我に会えた事を喜ぶがいい！」

「……そういえばお前、何で影じゃない！？
影を媒体にしなきゃこっちに来れないんじゃないのかよ！？」

確かに。今の『悪魔の王』^{ディアボロス}は、人間の姿をしてる。
見た目の姿は少年。肌は、色素が抜けた白。

白すぎる白。だが肌色。

顔は、美少年というべきものだった。

もう少し成長すれば、10人中10人が振り返るような美少年になることだろつ。

そして髪は、アルビノの、色素が欠けたような白。真っ白。紙のように白い。

「その質問には……後で答えよつ。

それよりも、今は用があるのだ」

そうつ言い合って、こちらへ歩いてくる相手。

「チツ！

風の精靈、我に答えよ！ そして大いなる力、『』に顎現せ「待て」と言つただろつ！

何で、魔法が使えないつ！？」

「『』の前のような影と一緒にしてくれては困る。

まだ『覚醒』も済ませていない四人の一人など、恐れるに足りん

「お前の用は何だ！
私を殺すのか！？」

「自惚れも程ほどにしや。

私は『』の村民に用がある。そつだな、先ほどの質問の答えにもなるだらう。

我のこの姿は、実体ある幻のよつなものだ。

確かに力は変わらんが、時間が持たない。だから、描くのだよ。

この村の、村民の血で、この村に、『召喚陣』を！

「な！ お前まさか！」

「やつと氣付いたか。

そう！ 我は今、今日此処で、『』側に『』をれる…。
そして戦つのだ！ 『』とお前と…！

美少年が、その見た目の歳に合わない裂けた笑みを浮かべる。

「何なんだよお前は！

『世界を纏めし四人の末裔』とか！

『』とか『』とか！

訳分からぬ事ばっかり言つて、そつまどして戦いたいのかお前は

！」

「そつだ！ 我は戦いたい！ 一戦いたい（殺しあいたい）！
折角の暇つぶしが見つかったのだ！ 我は王！ 傲慢だからこそ
王だ！」

両手を上にあげ、声高らかに叫ぶ『』。

「では、そつそくだが、生贊第一号はそひうの女にしょつ

私の後ろにある牢屋の中にいる、ずっと虚ろな瞳をしている女の子を指して、言つ。

ドゴオ！

と爆音が地下に響き渡り、そして土煙があがり、
それが引いた所には、
真っ赤な血で染まつた壁や床、天井と、真っ黒く炭化した人間の残
滓。

「クツクツク！ そうだ、もつと血を！」

と、その時。

「あの～、お取つ込み中スリマセ。」しかし『跳躍者』のアイになります」

！ 地下の扉の向こう側から、
何とも気まずい場所に入ってきた奴みたいな感じなアイ兄が入つて
きた。

馬鹿やろー！ おせーんだよー！

第三十四話 王の目的（後書き）

次話、王の目的が明らかに！？

第二十五話 再開、そして再戦。のはずが

どうも、アイです。

あの後、扉が開け放してあるでかい家の中に入つて、血の跡追つてたら、

地下への扉を見つけて、中に入るとそこには、

「な……てめえええええええ……」

妹が叫び、そして

「クツクツク！ そうだ、もつと血を…」

何か逝つちゃつてる子供がいました。

「あの〜、お取り込み中ス!!」ジャンパーマヤン。」ジャンパー『**跳躍者**』のアイになります

なんか妹の声で『末裔』とか『跳躍者』とか聞こえたから、一応あの事を知つてゐる奴かと思つて、こうこうふうに入った。

するとその瞬間、妹はこちらに視線を向けて、いきなり目に涙をためた。

「え？ ちょっと… 何？ 倦怠いの…？」

「ばかやうー！ もつと早く来て欲しかつたのに…」

周りを見渡すと、黒ずんでいる、牢屋の一角。

そしてその周囲には、臓物やらなんやらが転がっている。

「そつか。そういうことか。

でだ、アリア、これをやつたのは……そここの生意氣なガキか？」

「ああ……アイツは、『知つてゐるわ。『**魔の王**』だひ？』！
何で分かつて…！」

「ほつ、初見でよく我の本体を見破つたな。

わつとまでガキと言つてはいたのに」

「その『ガキ』つて一言の時、お前から発せられた殺氣ぐら分か
るよ。

で、お前のその体……つつてもまだ完全じやないか。
あの時のお前よりは強そつだが、やはり本当ではないんだろ？」

「クツクツク。やはり『**跳跃者**』。お前は面白い！
まったく、向こう側からまたこちら側に来て少しづか
経つていないとこに、お前はとことん我を樂しませる…」

「その様子だとやはりか。
アリア、何か聞いたか？」

「あ、ああ。ソイツ、この村を生贊にして、自分の大規模召喚？陣
を作る氣だ！」

それも、この牢屋にいる村民で完成するらし…」

ちつ、何だよ予想通りか。
予想通りでも最悪なパターンだが。

「この世界に召喚陣なんてあつたか？ 今度マスターにでも聞いてみるとして、

今はそれをどう阻止するか。

多分あいつの事だから、俺と戦つ為だけで村民を殺す氣だな。

「……なあ王？ やはりそれには『血』が無いと駄目なのか？」

「その通りだ！ 我と貴様の戦の食前酒だよ！」

我らの為に生贊になるのだ。本望だらう！」

何が食前酒だ。ふざけやがつて！

「お前には失望したよ」

「ん？」

一旦笑いを止め、一いちいちを睨む『ディアボロス悪魔の王』。

「俺が認めた戦友、王は、今のお前みたいに無駄な血を流す奴じやあ無い。

俺との戦いにのみ命を懸け、そして血を流す存在。少なくとも俺はそう思つていた。

だが、やはり悪魔は悪魔。失望したな」

「…………だから、どうした？」

我はお前との戦いのみが真情だ！

その為なら、例えどんな犠牲でも払おう！」

やはりそう簡単に引いてくれないか。

まあ、一度殺しあつた仲だ。性格なんて分かりきつてゐつもりだつ

たが……。

「どうしても、やるつもつか？」

「当たり前だろ？？」

「わづか……」

刀を抜いて、刀身に、

「付」、「風」属性

風が纏われる。

「お前との戦いはまだ先だと思っていたのだが、仕方が無い！
いく」「駄目です！」…………興を削ぐな！」

「…………」

あれ？ 今の絶対にバトルパート突入だつたよな？
だけど、もう魔法使うのやめちゃつたよ相手？

しかもその傍に、凄い露出の高い装備をしてる女がいるし。

「兄、あれってやっぱり悪魔か？」

戦いを見守るパートに入ろうとしていた妹は、
一瞬戸惑つた後俺に言つてきた

因みに相手は、その女と口論している。

「ああ、多分な。

王と口論できる程の者と見ていいだろ」

それについて……、まだ口論が続く。
何を話しているのか知らないが、

「長ー……」

シリアルな空気が一変してしまったよ。
KY女。

第三十五話 再開、そして再戦。のはずが（後書き）

一気にまたシリーズでなくなつた。

久しぶりの登場。

場所は変わつて。

……訂正、世界は変わつて、ここには元々、御神哀という人間が、人によつて作られた存在と戦い、敗れた世界。

そして、能力者保護の為の施設は、その敵によつて壊滅的なダメージを与えられ、

更に世界は、人間と、反人間能力者との戦争が各地で行われていた。

＼元・『HEAVEN』領域内／

傍から見れば、十人中八人が振り返りそうな美貌を持つ、中学生から高校生になるときの、何かが違つてくる年齢の女が、元『UNION』部隊本部のビルでの一室で、椅子に座つていた。

その部屋には、他にも四人程の人影も見える。

「……何でこんな事になつたのかしらね…………」

少女は呟く。

しかしその質問に答える者はいない。

そして少女は顔を上げ、一人の男の方を向く。

「荒祇君。体の調子はまつ良いの？」

「ああ。今は常時出撃体勢だ」

その男の横に並ぶ少女が男に言つた。

「けど無茶するなよ？」

アイツに続いて、お前も、もし「その話は止めてッ！」

……琴雪……

「きっと、きっと御神君は生きてるよ。」

私はそれを絶対信じてるし疑わない！だから帰つてくるまで、絶対に忘れない！」

「…………」

椅子に座る少女の少し離れた場所で立つてゐる、どこか少女の面影もある少年がそれに答へる。

「けど彼は、世界から娘まれてゐる。僕だってこんな事は言いたくないけど、もし生きてたとしても、無事には暮らせない……」

少女一人が下唇を噛む。
悔しいとつ思いが駆け巡る。

と、その時、

「まざいぞ！ おいお前ら！ 遂に人間が仕掛けできやがった！
早く準備しろ！ 長期戦だぞ！」

……『総隊長代理』！ 早く指示をしてくれッ！」

顔に大きな傷の有る中年の男が部屋の扉を蹴り、開けながら叫びつ。その言葉を聞いた途端、部屋にいたメンバーは顔を強張らせ、『総隊長代理』と呼ばれた、椅子に座る少女は椅子から立ち上がる。「……どちらにしても、アイにこんな醜態を見せるなんて申し訳が立たないわ！」

支援隊長『佐屋明』！

陽動隊長『飛驒燃故』！

特務部隊隊員『涼風琴雪』！

『荒祇聊爾』！

『不知火奏華』！

現時刻、『総隊長代理』兼『特務部隊隊長』の佐屋紫の命をもつてして、『HEAVEN』領域内に入る敵を撃退しなさい。」

「「「「はい！（おつしーー）」「」「」

「では、敵の進行度と、それに伴つ作戦を命じます

敵は来る。

それも、能力者でも無く、本当の敵でも無い、『人間』。

それに対して、能力者は圧倒的人海を前に生き残れるか。

「アイ、見ていいなさい！

絶対に、貴方の信念を突き通してあげる！」

第三十六話 幕間・元世界（後書き）

紫はその実力と頭、そして『敵』との戦いで実力が認められた。

第三十七話 なぜ一緒に？（前書き）

今回は一部のキャラ崩壊が激しいので、ご注意ください。

第二十七話 なぜ一緒に？

「……で、何でいきなりこうなる訳？」

今、俺と妹は村から出ている。

因みに、村からは数百人の村民が見送りに来ていた。

「まあまあ、アイ兄。これも……村民の為だつて。

……其処にソイツが居なければもつと良いんだけどな……」

妹が俺の横に並びながら、反対側を睨む。殺気が俺に当たるんだけどな妹よ。

俺は視線を反対側に向ける。

そこには、肌も白く髪も白い美少年が歩いていた。

「我こそ早くお主等と戦いわせしたい！」

だが、まあ、今は、ちょっとな……？

「そうです。私めが居る限り、貴方様に勝手な真似はさせん訳にはいきません。

これは向こう側の沾券じんせんに関わりますから。

元々、向こう側とこちら側は相容れない関係。

今から何億年も前にそう人間と契約したじやありませんか。

それを貴方様はいつもいつも……」

その少年のまた向こう側で歩いている、露出度が高く、胸元や下のほうが何となく危ない鎧を着ている女性が至極真剣な表情と口調で話す。

さて、なぜこいつなつたのだ？
しかも、ちやつかり普通に話してゐるし。
それの理由を話そつ。

少しばかり時を遡る。

此処は、数多くの村民が監禁を受けていいる地下。
目の前で、女性に説教を現在進行形で受けていいる『**悪魔の王**』^{デイアボロス}。
その姿は、確かに説教には動じていない様子だったが、次第にどんどん折れてきたようだ。

「あ～！ 分かった、分かった。
何かと理由をつけて此処にきた我が悪かった。だからもう説教はよ
せ！」

「まったく。次に何か問題起こしたら承知しませんからねー。」

「ハア～～と大きな溜め息をついたあと、一いちらを振り向く『**悪魔の王**』。

「**じょうがない**が、今回の戦は見送りだ。
せいぜい首を洗つて待つてい「違うでしょがー」……すまん

本当にやつきの妹と奴の雰囲気がぶち壊しだ。
恐るべき空氣変換（ＫＹチエンジャー）だなあの女。

するとその女が相手の前に出でてくる。

そして話し始める。

「すみません。今回の件に関してはこちから謝罪をさせてもいいます。

今回、王が無断でこちら側に来た本当の理由は、
『^{ジャンバ}跳躍者』様と『^{エンジェル}天使の末裔』様のお一方が倒した
男爵級の雑魚悪魔の肅清でござります。

なので、決してあなた達人間に危害を加えにきたのではありません

「ふざけるな……！」

妹が怒鳴る。

「じゃあアレは何なんだ！」

私達と戦う為だけに人の命を一つ奪つて！
あの命はどう説明する気だ！」

すると何か思い出したように『^{ティアボロス}悪魔の王』が言つ。

「ああ！ 確かそれは我的特殊な魔法で、
そこら辺に散らばつている血液や欠片は偽物で、実際の本体は近く
に転移される悪魔魔法だったな！」

「……ゑ

「あ、性格崩壊してないか？
つーか悪魔魔法って、まさか俺達を起こしせる為だけにそんなもん
作つたのか！？」

「お、おこH！ まさかお前俺達と戦う為に？」

「あ、ああ。その通りだ。

我が直々に逃亡した雑魚を肅清して、暇つぶしじつと思つたらお前ら一人を見つけたのだよ。

何だ？ さつきのやり取りか？

王の寛大さと愚民への配慮を見誤るなよ『跳躍者』？

私は一切、『世界を纏めし四人』以外に手を下す氣など始めから無い

い

「 「 」 (怒) 」 」

「まつたく。この事件の解決は貴方様に任せますよ？」

「う、わ、分かつた。我に任せろ。

.....『跳躍者』、『天使の末裔』。

先ほどは、その、すまなかつた。（チツ、コイツが居なかつたら今頃は戦を！）

ただの暇つぶしでも、人間に危害を加えたのは王として謝罪する。詫びとして、この村の村民の処遇は私に任せてもらおう

「な！ そんな事任せるわけ「良いよ」なつ！ アイ兄！」

「まあ、ソイツに任せるだけだ。でも、絶対最善の方法をしるよ王？」

「無論だ。では始めるぞ.....」

と、そんなこんながあった。

で、今は村から帰つてゐる途中というわけである。

キャラ崩壊！

第三十七話 なぜ一緒に？（後書き）

感想待つてます。

誤字は、ありますか？

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！（前書き）

遂に？の話数を越す時が！

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！

今は、ギルドの待機していた馬車に乗つて、その揺れを感じているところだ。

ああ、アイツ等も一緒に乗つてるし。

「まあ、王が居なきや犠牲者は増えるだけだった。そこは感謝だろ？」アリア

「う、そ、そりゃ そうだけださー。でも、ソイツだつて今までに何度も悪事を！」

「 我を犯罪者の様に言つな。

私は基本、他の人間には手を出さん。それは事実だ」

白髪の少年、いや、『ディアボロス悪魔の王』は、

妹の非難を軽々とかわしていく。

そして、更に向こうにいる女性が言つ。

「 そうです。この方はそれだけ（・・）は一応守つてござられたんですけど。

それだけは信用してもらつてよろしいです」

まあ、俺もはつきり言つとそつ思つ。

現に、俺とアイツが初めて会つて、戦つたとき、

俺との約束を守り、妹から攻撃されない限り危害を加えようとしなかつた。

まあ、あの時は妹が攻撃してしまったからだけなのだが。

俺が思つて、多分だがアイツは、俺達とのアイツが言つ所の『戦』^{『たたかひ』}の為なら、どんな約束でも守つてくれそうだ。まあ、あくまで多分だが。

「やつだ。おい『跳躍者』」

「何だ？」

いきなり隣から話しがけてくる王。言わんとしている事は予想つくが。

「お前はやはり強くなつたのだろう？ いきなりだが、その『マスター』とか言つ所のもとへ帰つたら、早速戦をしようではないか！」

この戦闘狂。妹の数万倍酷いな。つて、『悪魔の王』。『愁傷様』……悪魔にこれつておかしいか？

「だ～め～で～す～よお～？」

ちょっと、おはなししましょーか？」

あ～あ。

けどさ、アイツも憲りないな。

「なあ兄」

「んあ？ 今度はこいつちか。何だ？」

「やつぱつや。だつしてもアイツ等信じられないよ。

「あいつと何か他に目的がある？」

「だから、な？」

それは絶対無い。俺はそう思つ。

……まあ、アイツは俺達と戦いたいらしい。ナビジ

「ナビジー」

「…………なら、お前が判断しろ。

アイツをしばらく見て、本当に何か企んでるんだつたらそれで良い。それはお前が判断しろ。分かったな？」

「…………分かったよ」

はあ、こいつの相手も疲れるな。
歩きも疲れるし。

…………ちょっと待てよ？ 悪魔なら、もしかしたら転移魔法使え
るんじゃない？

「なあ『悪魔の王』？」

「なんだ」

「お前つて転移魔法使えたりする？」「

「…………別に、普通に使えるが何か？」

「それ使ってくれねーか？」

「…………」

「別にそれで良いなら良いが。

それでは目的地の座標をおS「居たぜ！ 獲物だアツ！」……（怒）

4

何だ？

いきなり黒車の外から大声が聞こえる。

それでハイツの声が途切れで何か下向いて「川」川震えてる

俺は前の窓から御者に話しかける。

「なあ、」の声は?」

「あ、あ、その、大量の賊が！」

震える声で言つ。

おいおい、行きで出なかつたから安全な道かと思つてたぞ。

「ふ、ふふふふふ。我的喋りを阻害するとは、生かしておけん……。」
「く、くくくくく。おい、お前は此処で待つていひ。我一人で行く」

そう言って、従者を止めて自分一人で馬車から出て行く王。
ここからは、外の声だけだ。様子は知らない。

「おい。この馬車が狙いで良いんだな愚民?」

「んだあこのガキ！ まつたく躰がなつてねえ、ツ！－！？？？」

「ガキでは無い。王だ。安心しろ。これでも愚者には慈悲ぐらいかけるぞ？」

今すぐ医者に駆け込めば助かる傷をつけてやろ」

「て、てめえ！ ばけもつ……ガアアああ！…？？？？？」

「ひ！ に、にげろつがははがあかかかあああ！？？？？？」

ふふふははははは！ 逃げ惑え愚かな民よ！」

一た、頼むから助けッ！」

「ああ、おまえが座た。なんせお嬢さん、生かしやう。

一
ホ
シ
ト

一 やるかあああああああ！」

あくゞ！
へゞ！？
dしふえあおあs
m f : あ

ひよこはまじつやじつ ごうじけん

その他諸々リビング×50程度

そして静寂が訪れる。

て い た。

「おーおーおー！ アイツ何してー。」

俺は後ろに妹がついてくるのを見ながら、馬車から出る。
そこにま、

「ふむ。これぐらいか」

傷は勿論、服に血の一滴も掛かっていないアイツがいた。
そしてその周りには血の海が広がり、（決して比喩ではない）
死体は一つも無かった。

「安心しろ。アイツ等はちゃんと殺さずにしておいた。
まあ、今頃は近くの街の医者がてんやわんやだらうがな！」

そして笑う王。

……何か不安になってきたよ俺も。

第三十八話 必殺滅殺大虐殺！（後書き）

何かこのままの進み具合だと？ - ? ができるそうな気がする。いや、
？か？

第三十九話 『好敵手』対『師』（前書き）

マスターのリアルではつきりとした戦闘シーンって、
これ最初でしたっけ？

第三十九話　『好敵手』対『師』

「なるほど。

こやつが『跳躍者』の言つとこりのマスターか。

『世界を纏めし四人』でも無ければ、悪魔でも無い。しかし普通の人間とも言い難い力。

……興味があるな

「それはどうも。君は、悪魔……で良いのか?」

「ああ。私は『悪魔の王』であるティアボロスと言へ。して、『^{ジャンパー}跳躍者』は強く鍛えているか?」

「アイの事ですか。

まあ、あいつは凄いですよ。もつ自分のオリジナルの魔法を考えたらしく」

「そうかそうか。それは楽しみだ!」

マスターと『^{ディアボロス}悪魔の王』は、

俺とマスターと妹が住んでいる家の庭にある、ティータイムの時に使う木の椅子に座つてマスターと世間話、もとい俺の話をする。

「つておいー 何でそんな友好関係築いてんのー!?

思いつきり紅茶を飲みながら、

この街の戦力代表みたいなマスターが悪魔と談笑つて、シユールだ。めっちゃシユールだ!

あ、因みに言うと「家に帰つてきた。

ギルドに行き、俺と妹のギルドカードには、

『男爵級悪魔討伐』の記録が記され、更に妹は一気にEからBに上

がつた。

俺は変わりないが。

それと、『悪魔討伐』というのは滅多にできるものでは無く、
悪魔の殺し方も全く不明になつてゐるらしい。

その『撃退』という依頼を『討伐』という形で達成したので、
ギルド本部から依頼料の更に一倍近くを貰つた。

これで金も稼げて一件落着。

しかし家に戻れば、
なんと『悪魔の王』^{ディアボロス}とマスターが談笑しているではないか！
さつき見た時は驚きすぎたよ。

しかし、マスター曰く、「この悪魔の王は人間には危害を加えない、
常識と理念をもつた悪魔だ」

との事で、やはりマスターも気にしているようだ。

「では、一戦やりますか？」

「ほう。人間の身にして悪魔の王に勝負をかけるとは！
面白い！ その勝負乗つた！」

「え？ はい？」

「え、ちょっと！ なんでそんなんに為つてんのさ…」

「アイ兄の言つとおりだ！ 何でまた戦いなんて！」

するとマスターは手を肩まで上げて、ヤレヤレと首を振る。
そして『^{デイアボロス}惡魔の王』は、

「安心しろ。この街の人間や建物には一切被害を『^ハネない』し、
万が一も無くとも、我はお前ら以外の人間は殺せん」

「そうだぞアイ。それに私ももつとひそひそして詭つてきてしまつてている
からな。

偶には『^ハニツのも良いかと思つてな』

「まあ、マスターとやらも同意しているのだよ。
地下があると聞いた。そこで戦^ヤう！」

「ああ。では着いて来てくれ」

マスターは『^{デイアボロス}惡魔の王』と一緒に地下の部屋に向かつてしまつ。

「おこおこおいおいおこーー いくらい緊急転移魔法があるからって、
あの一人がバトルとやばいって流石にー
よし、アリアー！」

「な、何ッー？」

いつもと違う様子に妹が驚く。

「もしもの為に俺達も逝くぞー！

……違つー 行くぞー！」

「あ、ああー！」

地下の部屋に急いで向かつ。

そして地下の部屋に着いて、
その扉を開けた瞬間、

「グッ！」

「うわー！」

突風が吹いてきた。

続いて聞こえるマスターの詠唱。

「風の精靈、我に答えよー、そして風塵を散らせ、その身を天に飛
ばせ！」

『ミストラル・ダウンバースト』！

瞬間、下から上にかけて突風が吹き、『悪魔の王^{ディアボロス}』が浮きあげられ

たと思うと、

さつきの何倍も強い風が上から下に吹き、アイツの体を地面に叩き
つける。

「ぬうッ！ まだまだだ！」

現世に存在する根源に宿りし全ての闇よ！ 我、悪魔の王に従い、
敵を鎖せ！

『ブラック・コフイン』！

瞬間、マスターの四方八方から黒い闇でできた、ギロチンの刃のような鋭い刃物の壁が、マスター視認できなくなるくらいに、

文字通り、閉ざした。

そして直ぐにそれが開かれる。

中からは血まみれのマスターがでてくる。

しかし、

「ぐつ、まだまだあ！」

マスターは直ぐに体勢を元に戻し、戦闘の準備に入る。

その率直な感想。
妹と俺は同時に、

「「凄い…………」」

呴いていた。

第三十九話 『好敵手』対『師』（後書き）

COFFIN 棺

第四十話 話の始まり

「ハアつ、はあツ、はあ……」

「ふ、フツフツフツフツ。流石、と言つべきか！
我をここまで追い詰めるとは！

もし貴殿が我と対等の魔力量を保有していたならば、戦況は分からなかつただろう！

やはり貴殿には『ジャンパー跳躍者』の師としての器があるようだ！
気に、気に入つたぞ！」

「はあ……ハア……そ、それはどうも。

私ももう魔力切れだからね。良い線行つたとは自負してゐよ。

それにして、悪魔の王に認められるなんて光榮だな」

俺達の目の前には、勝負が終わつて、

地に膝立ちで、疲れきつた顔をしているマスターと、
その正面に、いまだ威圧感のある表情で立つ『ディアボロス悪魔の王』がいた。

そして今は、強者らしく相手を認め合ひ、
仲良く話している。

ほんの数十分だつたものが、

今では何時間もかかったのではないかとも思えてしまう程の戦いだ
つた。

まさしくそれは、『闘い』ではなく『戦い』だつた。

この一人だけでも戦争を引き起こせる程の戦力を見せ付けられ、俺も、横にいる妹も、自身の未熟さを思い知らされた。

「……なあアイ兄、……」

「何だアリア？」

「……私、もつと強くなりたいよ。

そしていつか、絶対にアイ兄を越えて、あの一人も越えたい！」

「ハハッ、お前なら本当に実現させそうだよ。

……そう、だな。

俺達も、もつと強くならなくちゃ、だな」

妹と視線を交わし、お互に意思を確認する。するといきなり、

「そこの一人、ちょっとこっち来なさい」

マスターから呼び出しがあった。

俺達はマスターと『悪魔の王』のところにいく。

「よし。話があるんだがな……」

「なんですか?」「なんだ養父さん?」

「いや、それは我から言わせてもらいたい」

『悪魔の王』が横から言つてくる。

「ん、まあ良いですよ。じゃあよりしぐお願こしあす」

一
あ
あ

我と貴殿で話し合つたて決まつた事がある。
それは、我と貴殿で、『**跳躍者**』^{ジャンパー}と『**天使の末裔**』^{エンジェル}、
お主等一人の訓練をつける事になつた

— え —

「ああ。 言い忘れていたが、二ヶ月ずつの交代制で、我と貴殿の両名から訓練をつけてもらえ。」

その時、俺と妹の思考がリンクした……ような気がした。

（一）イツ絶対何か企んでやかる！！！

別に我は企みなど持た~~思~~せであります

向けて、だらうか」

「え？『救世主』って、もしかしなくても、『世界を纏めし四人』

何で俺達と戦う事前提?
といふかその説明をして

というかその説明をして欲しい。
頼む。

- 1 -

「…………」

「……仕方無い、か。

この真実も、いずれは辿りつくもの。今のうちに話しておいた方が得策か……。

……良いだろ？、我から話そつ。貴殿も聞いておけ。その為の試合だ。

では話そう。『世界を纏めし四人』。

世界の歪みを正し、神にのみ従つ者『救世主^{メシア}』

世界を混沌に落とし、悪魔の頂点に立つ者『悪魔の王^{ディアボロス}』

異世界より召喚され、善にも悪にも成り得る存在『跳躍者^{ジャンパー}』

世界に光を宿し、天界に住まう天使の子『天使の末裔^{エンジェル}』

この四人の運命は、

遙か遠く、何処か分からぬ、何時か分からぬ世界で、動き始めた……

第四十話 話の始まり（後書き）

遂に！

第四十一話　『世界の眞実』

「……事の起こりは数世紀前。

いや、我でも知らぬ、

この世界の誕生した瞬間、それは起きたと言われている

ゆつくりと、いつもよりも神妙な面持ちで話す『惡魔の王』^{ディアボロス}。

「世界には、『意思』がある。

その『意思』は、人間、惡魔、動植物、その他自分の下位に有る存在の

運命を御し、誕生、消滅の時、その根柢まで制御した。

だが、その『意思』は、何を思ったのかある日、考えた。
この、退屈な日々。

生命を生み、その運命全てを操り、そして消滅させる。

この均衡をとるための単調な作業。

それに、ある考えが加わった。

『意思』は、この退屈な世界　　自分自身　　に、
ある刺激を加えようとした。

それが、自分自身を御す事のできる『生物』に、自分自身の権利の
霸權を争わせるもの。

そしてそれは、直ぐに実行に移された。他ならぬ世界の『意思』によつて。

その『意思』の狂喜から出来た、この世界で最大、最強、最狂、最
凶の『生物』。

それが、『世界を纏めし四人』。

そしてその『四人』には、それぞれ『役割』が振られた。まるで本当のお遊びのよつこ、な。

『救世主』^{メシア}。

この世界の過去に、全ての人類の命を救い、
そして現在のこの世界に召喚された、正に救世主。

『悪魔の王』^{デイアボロス}。

その時が来たとき、突然変異で悪魔の間に生まれる、
全悪魔中最狂の悪魔。これはほとんどが王になる定めだ。

『跳躍者』^{ジャンパー}。

元々は異世界に存在しているはずの、

世界にとつての不規則。四人の中で唯一、魔法ではない力を持つ者。

『天使の末裔』^{エンジェル}
^{デイアボロス}。

『悪魔の王』^{デイアボロス}と同じように、天使の間に生まれる、
全天使中最高位の力を持つ天使。

しかし、神より大きい力を持つものは、地上に墮とされるものだ。

そして、その『四人』の中で、格が違うのは『救世主』^{メシア}。

その経験豊富な戦闘能力と、世界に住まう人間を救つた力。
更には、他の三人と違うところがある。

それは、

『一個体』だからこそ、何度も、何度もこの『霸権争い』に参加できる狂者。

『救世主』^{メシア}は、世界にいる人々を救うために、永遠の命の呪法を体に刻んだ狂信者だ。

そして、『救う』ために、世界の不規則となる、我々三人を倒す為に動く。

まさしく、人間のために動き続ける者だ。

話によれば、過去にも幾度か、『四人』の戦いが起こつたらしい。その結末までは、我でも知らない。

……そして、今回の、

世界の『意思』による『お遊び』の『お友達』に選ばれたのが、

我々だよ。現『^{ジャンパ-}跳躍者』のアイ・M・ウイルドレース、現『^{エンジェル}天使の末裔』のアリア・M・ノーヴィス、そして現『^{ディアボロス}悪魔の王』をやつている、我だ。

そうだよ。

我々は、道具だ。

我僕な子供に適当に買われて、適当に捨てられる、

儚い存在なんだよ

第四十一話　『涙』、それは嬉しさ故に（前書き）

「これで、？は、終わり。」

第四十一話『涙』、それは嬉しさ故に

ドガツ！

と、壁から鈍い音がして、自らの手からも血が零れるが、構うか！

「何なんだよッ！ 一体何で俺が、こんな目に…
世界の『意思』、『四人』！
ふざけんじやねえ！ 僕は僕だ！」

ドゴオア！

更に壁を殴る。

もう左手に感覚など残っていなければ、また振るう。

世界の『意思』に振り回されて！
その為だけに、俺は！ 俺は！

紫を！ 悲しませている！
脚を！ 落しませてくる！

「アイ兄……」

「……『**ジャンパー**』、『**跳躍者**』、『**エンジェル**』、『**天使の末裔**』。

今、我が話した事は全て事実。

だが！ ここで悔やんでいたとしても『運命』は変わらん！

いざれは、狂つた『救世主』との戦がある！
その為に、我々は強くならなければならんのだ！

『悪魔の王^{デイアボロス}』は、珍しく必死に俺に對して声を張り上げる。

そして妹…………アリアは、俺を見つめる。

「…………なあ、アリア？」

「な、何？　アイ兄？」

「…………俺と、こんな、俺と会って、兄妹になつて、それで、お前は幸せか？」

こんな世界の『意思』に振り回された拳句、
会わなくとも良かつた人と出会い、そして兄妹^{きょうだい}にまでなつてしまつた。

例え世界のせいだとしても、俺は自分が許せない。

こんな、振り回された事を自分でさえ氣付けぬまま、
アリアを巻き込んだ。

「もし、もしも俺と関わる事が無かつたら、
アリア、お前は、幸せだったか？」

「そんな事無いッ！」

即答。

それが妹、アリアの、俺に対する答えだった。

「私は、独りの時に、アイ兄に会えてよかったです！
私は、もう寂しくなくなつた！

例え、誰かが私達に関わつても、
私は、アリア・ミカミ・ノーヴィスは、
絶対に、兄、アイ・ミカミ・ウイルドレースと、

出会つた事を、後悔なんて、しないつ！

頬に、何か流れる感触がする……。

長らく、元の世界で流したつきりの、ものを。

「…………そう、か…………。

そう、か。
な、ら…………、俺も、

俺ッ！ アイ・ミカミ・ウイルドレースはッ！
例え、何が起こつても！ 誰が敵に回ろうとも！
決して、妹、アリア・ミカミ・ノーヴィスを！

傷つけさせないッ！

妹には、俺と、

同じものが、流れていた。

お互ひ、我慢して、耐えてきたもの。

『涙
を
。』

第四十一話 「涙」、それは嬉しさ故に（後書き）

短いでしょうが、

次からは、？の一期突入。

因みに、間隔は空かないと思うので、続編ではなく、
続話と思つてもらつて結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475n/>

In The Material ?=? Another World

2010年10月9日18時50分発行